# 芥川龍之介「手帳六」考続貂　附図版・翻刻・略注・筆記用具一覧表

## ――「奇遇」との関係を起点にして――

章　瑋

### 一　本研究の出発点

昨年（令和三年）三月十三日、稿者は国際芥川龍之介学会ISAS第二回研究集会において、「芥川龍之介　一九二一年の中国旅行と「奇遇」の虚実―「絹帽子」と「雛」草稿」の直筆資料から見えるもの―」と題して口頭発表[1]をした。その後、いただいたコメントを中心に継続調査を行っており、本稿は、主に五島慶一氏のご質問、及び西山康一氏のご指摘をもとに調査した成果報告に当たる。

五島氏は、「奇遇」（『中央公論』、大十・四）の冒頭に数多くの中国旅行記が列挙されていることの役割について問題提起された。また西山氏は、大正十年三月下旬、芥川が大阪に約一週間滞在していた間に、大阪毎日新聞社のために執筆した作品が「仙人」（『サンデー毎日』、大十一・四・二）ではないかと指摘され、さらに同氏「新発見の封筒が持つ可能性　実物により見えてくるいくつかの疑い」[2]を教示された。

西山氏は同論の注六において、芥川が残した「手帳六」に、「「仙人」に関するメモが、中国旅行中に記されたと思われるメモのすぐ前に置かれている」と指摘している。「仙人」と「奇遇」が立て続けに大阪で執筆されたとすれば、「奇遇」のメモも「手帳六」に書き込まれている可能性がある。現に『芥川龍之介全集』第二十三巻（岩波書店、平十・一、以下、この現行版全集を指すときは『全集』と略記）の「手帳六」の後記に、本文校訂を担当した石割透氏が、「この手帳に記されたメモと関わる作品」として、「奇遇」を挙げているのである。

しかし『全集』の翻刻を見る限りでは、「奇遇」に関わるメモは見出せなかった。そこで藤沢市文書館に所蔵されている「手帳六」の原資料を調査し、新たに翻刻を試みた次第である。[3]なお、本研究は藤沢市文書館で撮影した「手帳六」の写真データをもとに、画像編集ソフトPhotoshopを用いて色調を補正した上で翻刻した。資料調査・撮影にあたり、同館学芸員の中村修氏をはじめとする職員各位から格別のご協力をいただいたことに対して、心より御礼申し上げたい。

## 二　『全集』本文の漏れ

先に結論に至る経緯について触れておくと、西山氏にご教示いただいた「手帳六」の調査を通して、『全集』本文に収録されていなかった「奇遇」関係のメモを発見した。それが偶然にも五島氏への回答の端緒となったのである。

繰り返しになるが、五島氏は「奇遇」の冒頭で列挙される複数の中国旅行記について質問された。この中には、幕末・明治期の漢学者である岡鹿門（千仞）の著書『観光紀游』（明十九・八）が含まれている。今回「手帳六」の原資料を調査した際に、『観光紀游』を示すメモ「岡　庫門著　観光紀游」[4]を発見したが、『全集』の翻刻では確認できなかった。また「奇遇」で言及される旅行記のうち、『日本近代文学館所蔵資料目録二　芥川龍之介文庫目録』（昭五十二・七）の中に、同書（明二十五・十一再版）のみが確認されることも注目に値しよう。

「奇遇」の主人公である「小説家」は、『観光紀游』を含めた旅行記を、出発までに「まだ一冊も読まない」としていた。しかし芥川は『観光紀游』を所蔵しており、大阪で執筆した「奇遇」に同書の書名が上がっていることと、「手帳六」中のすでに出航後と思われるページに該当メモが書き留められていることから考えると、芥川は出発前に同書を読み（事前に読まなければ、現地の中国で思い出しながら手帳に書き込めることはできないであろう）、一貫して同書に興味を示していたことが窺える。

このことをさらに突き詰めれば、「奇遇」と『観光紀游』、並びに芥川が旅行から帰国後、「手帳六」を参照しながら執筆に取りかかった「上海游記」（「大阪毎日新聞」、大十・八・十七～同九・十二）をはじめとする中国旅行記との関係を、より明確に把握できると考えられる。ただしこの点に関しては、別稿で詳細に論じることとしたい。

話題を「手帳六」に戻すと、右に述べた『全集』における「岡　庫門著　観光紀游」の翻刻漏れ、及び「手帳六」と「奇遇」との関係は、水沢不二夫氏が夙に指摘していた。水沢氏は「手帳六、七」の再翻刻に取り組み、「芥川全集「手帳（六・七）」未収録分」の注九において、岡千仞の紹介とともに、『観光紀游』は「奇遇」に所出。芥川が旅行前に関心を持った観光案内書の一つ[5]」と説明している。さらに遡れば、石割氏は前述した『全集』の後記において、「手帳六」に「記されたメモと関わる作品」として「奇遇」を挙げていた。それは同氏が実際に「手帳六」の原資料を確認し、当該のメモに気付いていたことの証左だと考えられる。

このようにして『全集』第二十三巻に収録された「手帳六」には、原資料から翻刻されていない内容がある。水沢氏はこれを補完するために「手帳六、七」未収録分を翻刻したが、後述するように資料の状態や当時の技術的な制約のため、なお遺漏があった。こんにち撮影機材の性能向上と並行して、画像編集ソフトも飛躍的に進化している。そこでこれらを活用し、改めて翻刻したものである。

以下、改めてこれまでの「手帳六」の翻刻史を振り返りながら、この度の翻刻に際して注意したことを確認したい。

## 三　「手帳六」の翻刻史

### 第一期【昭和初期】

『全集』第二十三巻に収録された「手帳六」の翻刻について、石割氏は後記で「破損の度合いが激しく、判読不可能の箇所が多いために、前回全集の「手帳六」を底本とした」と述べている。ここでいう「前回全集」とは、岩波書店が昭和五十二～五十三年に刊行した『芥川龍之介全集』（全十二巻）であり、「手帳六」は「手帳（一―十一）」の一部として第十二巻に収められている。さらにその後記は、「元版全集別冊所収本文に拠った」と示しながら、昭和二～四年に岩波書店から刊行された『芥川龍之介全集』（全八巻、以下「元版全集」と略記）の「月報第八号」に掲載された「編輯者のノオト」の一部を引用している。そこで改めて「元版全集」の「月報第八号」から、「**○手帳**」から始まる一節の全文を引用したい。

**○手帳。** 約十冊の手帳を整理したものである。手帳の表紙の裏にある暦によつて、それぞれの年代は解つたけれども、それは明記しないで置いた。そして唯、それらをそれぞれの年代順に並べて置くに止めた。それは例へば大正五六年度の手帳にも、ずつと後年になつて書かれた事の確かである部分が少くないためである。これらの手帳は、大抵走り書きで、実に字が汚なく、それらを判読するのには随分骨を折つたのである。それでも不明だつた箇所は少くない。そのため一センテンスの分らないものは止むを得ず削除し、どうにか意味の分る様なものはその不明の文字だけ□印をもつて代へた。又、発表の差支へのあるやうな箇所は適当に伏字にして置いた。猶、○印は我々が打つたものである。それから図は全部省略した。それは共に、別冊の原稿があまり多過ぎたため、手帳にのみ充分な頁を与へる事が出来なかつたからである。最後の十一は西洋紙のレタア・ペエパアに書かれそして手帳の間にはさまれてゐたものである。便宜上、手帳の最後に附け加へる事にした。（傍線稿者）

右の引用は「約十冊の手帳」全体に対するもので、必ずしもすべてが「手帳六」に当てはまるわけではないが、「一センテンスの分らないもの」の削除や図の省略などがあることは、ひとまず事実として受け止めたい。しかし、このような方針は決して責められることではない。「編輯者のノオト」の直前に掲載された佐佐木茂索の「編纂余言」によると、「手帳」が収められた「元版全集」の『別冊』は、「堀辰雄君の異常な刻苦に負うてゐる。「手帳」の乱雑な文字を判読し、筆写する労だけでも容易のことではなかつたに違ひない」と、「約十冊」もある手帳に書かれたメモは、すべて堀辰雄が一人で整理して書き写したものだということが分かる。また、同「月報」最終ページの「事務室から」によれば、校正を担当した佐佐木の苦労も堀に劣るものではなかったろうという。かくして翻刻された「手帳六」には、少なからず問題が認められる。とはいえ、約千頁も及ぶ『別冊』を担当した堀・佐佐木両氏の熱意が成し遂げた一大成果であると言えよう。

なお「元版全集」に続いて、岩波書店が昭和九～十年の間に改版

した『芥川龍之介全集』（全十巻、以下「普及版全集」と略記）の第九巻にも、「手帳より」の見出しで「（大正五年―大正十五年）」の手帳が部分的に翻刻されている。しかしその中には、「手帳六、七」はなぜか一切収録されなかった（本稿四十九ページ参照）。

**第二期【平成初期】**

石割氏の後記からは、約一世紀前に堀辰雄によって翻刻された「手帳六」（及び「手帳七」、続稿で検討する予定）が、今もなお『全集』の底本として採用されていることが分かった。一方で、所在が分かっている手帳に関しては、この二冊以外は原資料にあたって徹底的な見直しが行われたことも、同氏による「芥川龍之介の手帳やノート断片―藤沢市文書館所蔵「葛巻文庫」から」から窺える。

同稿によると、芥川の手帳は「元版全集」が「手帳（一―十一）」として活字化してからしばらく所在不明となったが、『全集』第二十三巻が刊行される一年半前の平成八年五月に、芥川の姪である葛巻左登子氏が藤沢市文書館に寄贈した三千点の資料（「葛巻文庫」）の中から六冊分が発見された。石割氏はこの六冊の中の「手帳三、四、八、十一」を『全集』の底本として採用したが、「手帳六、七」は「火災のための破損が著しく判読するに困難な状態」[6]であることを理由に底本とはしなかった。

発見された当時、最も損傷がひどいとされた「手帳六、八」の状態について、藤沢市文書館の櫟原直樹氏が「葛巻文庫の芥川龍之介自筆資料―ノート断片・草稿断片・手帳―」において、次のように記している。

①表紙は、破損して無くなっている。
②本文紙は、しみ、汚れ、全体にわたる変色、破れがあり、欠損している。
③赤インクがにじみ、重なった他の頁に色移りしている。
④他の印刷物の断片がはさまれ、その断片の劣化と共に、元の頁のイメージが浸食されている部分がある。
⑤その他、水か薬品に侵されたと考えられる紙力低下や鉄さび等による損傷がある。[7]

また、そのときの手帳の様子は、藤沢市文書館で撮影されたマイクロフィルムに記録されている。[8] マイクロフィルムの撮影が済んだ後、平成九年度に「手帳六、八」の修補脱酸処理が行われ、翌十年度には、「手帳七」を含む残りの四冊の修補が行われた。「手帳六、八」は、「紙の劣化が著しく、元のとおり製本することが不可能なため、解体し、折丁を開いた状態で、修補、紙力強化、脱酸後、エンキャプシュレーション処置」がなされ、「これらの処理により、頁を開くたびにボロボロと破損が進んでしまう状態から、手にとって閲覧することができるようにまでなった」[9]という。

「手帳六、八」の修補が行われた時期――平成九年度――に注目すると、それがちょうど平成十年一月に刊行された『全集』第二十三巻の、おそらく編集の最終段階に当たる時期と重なっていることに気が付く。石割氏はあくまでも原資料の状態を鑑み、『全集』の底本に採用しなかったと説明しているが、『全集』の編集日程という制

約もあったのかもしれない。また、手帳の日記欄の一部しか残されていない「手帳八」[10]は『全集』の底本に採用できたとしても、約百ページのメモを有する「手帳六、七」に及んでは、修補前の状態で本文校訂を行うことには限界があったに違いない。

一方で、『全集』の本文校訂とは別に、櫟原氏によって手帳を含む「葛巻文庫」の調査が行われた。前出櫟原論の中から「手帳六」に関連する報告を引用したい。

> 一九二一（大正一〇）年、大阪毎日新聞社発行社員手帳。縦一四〇ミリ、横六七ミリ、右開き。本文は、一ページが五日分の日記欄形式。巻末に縦罫ページ、付録ページ、住所録ページ付き。表紙は破損して無い。また、日記欄の四月一一日～四月三〇日の四頁分が欠損している。カビと思われる色素定着が頁の半分を占めており、判読が不可能な部分が多い。
>
> 日記欄を無視して、最後部ページより青インク、鉛筆を使用して書き始めている。内容は、一九二一（大正一〇）年三月下旬～七月下旬の中国旅行に関するメモと推定される。元版全集本文と比較して、二十六カ所にわたる省略や異同があり、他に天心第一女子師範学校敷地図など、七カ所に見学箇所の図が描かれている。また、上海滞在中に、龍之介が会った中国共産党創立メンバーの一人でもある李人傑の名が、大きく墨書されている頁もある。この頁は、その他の部分も元版全集本文では省略されている内容で、「信濃をめぐりあるくヴガボンド…」「Bridge House Hotel」等のメモが記されている。[11]（写真の引用は省略）

特に右の引用の中で、手帳の各部分の構成と欠損ページについての情報は、本稿第四節で取り上げる「手帳六」の復元方法を模索する際に、重要な参考となった。また、手帳の復元を通して、いくつかの情報を更新できたことも第四節以降で詳述したい。

## 第三期【平成十年代】

昭和初期に堀辰雄によって筆写された「手帳六、七」の本文は、削除や省略などの問題を認識されつつも、発見時期や劣化によって平成初期には校訂されず、そのまま『全集』に再録された。他方、『全集』とほぼ同時に「手帳六、七」の修補が進行し、ついに原資料にダメージを与えることを抑えながら、手にとって閲覧できるようになった。そこで『全集』未収録分の調査に乗り出したのが、第二節で言及した水沢氏である。

水沢氏の報告[12]は、「手帳六、七」の未収録分の翻刻のみならず、詳細な注釈を施した上で、『全集』における該当箇所のページ番号及び前後の記述も記載したことで、新たに翻刻された部分が『全集』のどのページに当たるかも確認できるようになっている。後述するが、今回の翻刻に際しては多大な学恩を蒙った。

しかし一方で、経年や火災などによる劣化のすべてを、修補によって復元することはできない。一例を挙げると染みである。本稿でいう染みとは、前出櫟原論においては「カビと思われる色素定着」と説明され、水沢氏が「インクの滲み」と説明するものに当たる。

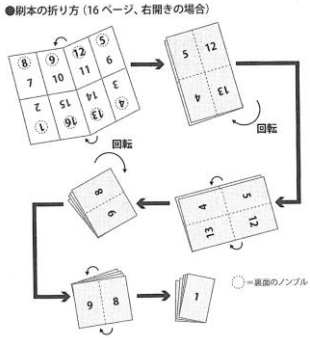
水沢氏はさらに「今回も判読不明箇所は多々残っ」ており、「紙面の都合と、原資料のインクの滲みにより、挿絵・図は今回も一部しか復元できなかった」としつつ、「写真版と翻刻とを備えた資料の出版が望まれるが、インクの滲みがあまりにも酷く、現在の技術では困難かもしれない」[13]と、昭和初期に堀辰雄が翻刻したときにはなかった染み（本稿四十九ページ参照）が、翻刻の障害となったことを記している。

この染み――メモを覆い隠すかのように「手帳六」の中心（背）から左右のページへと左右対称に広がり、濃い紫色の翼を広げる蝶にも見え、ページを捲るにつれ薄くなっていき、鳥にも見えてくる――は、確かに水沢氏のいうように、翻刻の大きな障害である。しかし染みは、それができた瞬間のページの前後関係を記録しているという特徴があるから、「手帳六」の復元に活用することができた。その活用方法は、次節で述べたい。

## 四　本研究の取り組み
## ―「手帳六」の復元から翻刻へ

前述の通り、「手帳六」の原資料は修補に際して折丁が解体され、エンキャプシュレーション処置のうえ一枚ずつポリエステルフィルムに封入されている。この状態の資料は、片面に二ページが並んでいても、見開きとは違い、必ずしも連続のページではない。ページ順通りに翻刻することも本研究の課題の一つであるため、翻刻に先立ち、片面ごとに撮影・印刷した資料写真を、「手帳六」の原状通りになるようにページを整序することから始めた。その際に参考したのは、修補前に撮影されたマイクロフィルム[14]と、前節で引用した櫟原氏による「手帳六」の構成及び欠損ページの情報と、そして染みである。

マイクロフィルムには、一コマあたり手帳の二ページ分（見開き）が写っている。通覧すると、八コマごとに手帳の中央に綴じ糸が見える。また、その半分に当たる四コマごとに、左右の折丁の間に隙間が確認できる。つまり「手帳六」は、最も一般的な八つ折りと呼ばれる方法で、表八ページ分と裏八ページ分の計十六ページが両面印刷された用紙（刷本）を、二つ折りを三回繰り返して作られた冊子である（【図一】[15]）。



【図一】八つ折りの折り方と各ページの関係図

一方で、解体された原資料は一枚（左右裏表の四ページ分）ごとにポリエステルフィルムに封入されている。ポリエステルフィルムの上部にはマイクロフィルムの資料番号等も貼られており、番号を追いながら元のページ順で閲覧できるように配慮されている。

しかし、実際に撮影した写真を組み直すと、マイクロフィルムのページ順通りにならない箇所がある。これらの箇所を分析すると、折り目が劣化して左右のページが切れてしまい（片方紛失の場合も

ある)、修補の際に誤ったページ同士を繋ぎ合せてしまったことによると考えられる。

このような箇所は、手帳の全体にわたっており、総数も多いため一々指摘することはしない。本研究は、撮影した原資料を印刷して複製を作り、十六ページが一つの折丁であることを手掛かりに、修補で繋ぎ合わされた部分を適宜折り目に沿って切り離し、本来あるべき位置に配置した。

このように原資料のうち、マイクロフィルムのコマと対応する部分の配置はほぼ確定した。しかし「手帳六」のマイクロフィルムは、メモがある部分を中心に部分的に撮影したものだったため、[16]「手帳六」の約半分を占める、メモがない印字ページ(日記欄の一部[17]を含む)は撮影されていない。これらのページについては、印字ページにあるページ番号と、櫟原氏が指摘した「手帳六」の構成などを手がかりに組み直した。また、上述したいずれの手がかりもない場合は、染みの形状でおおよその位置を定め、前後のページと折丁の形に整えてから、見開きの状態で染みが左右対称になるようにページ順を調整した。そしてこの段階で把握した欠損ページは、白紙で補った。

以上の工程を経て、「手帳六」の写真を元のページ順通りに復元し、参照しやすいように右開きに合わせて右から順に通し番号を付した。これにより、新たに判明したことを挙げる。

① 「手帳六」は表紙とともに、前後の見返しも欠損している。

② 本文は八つ折り(十六ページ)で折られた用紙を一つの折丁として、十四台(台は折丁の単位)計二百二十四ページを有している。

③ 前後の見返しと隣接する、本文最初の一・二ページと、最後の二百二十三・二百二十四ページは見返しとの接着部分が多いと思われるため、同様に欠損している。

④ 上記以外、現存しないページは、十五〜十八・二十九〜三十二・五十五〜五十八[18]・六十五〜六十六ページ[19]である。

## 五 「手帳六」の翻刻

「手帳六」のうち、欠損ページやメモのないページは、実に全体の半分以上を占めている。ゆえに本稿の体裁上、メモがあるページの図版を一ページずつに分割して掲載し、翻刻を行った上で、必要に応じて略注[20]を施した。

また、「元版全集」の翻刻を引用し、『全集』のページ番号を併記することで利便をはかった。翻刻の構成は、下図(【図二】)の通りである。

【図二】翻刻の構成
(反転タイプあり)

なお図版の分割によって、「手帳六」における各折丁の関係が確認できなくなってしまう。そこで本稿をより完全な形で参照できるように、欠損ページを白紙で補った上で、「手帳六」の全体を元のページ順に製本した私家版を別途作成し、藤沢市文書館に寄贈する予定である。

## 凡例

一、底本には、稿者が撮影した藤沢市文書館所蔵の「手帳六」の写真を用いた。藤沢市文書館の許可なく、転載・転用および複写することを禁止する。

一、現在欠損している本稿五十ページは、昭和十年三月に刊行された「普及版全集」の「月報」第五号によった。

一、「元版全集」の『別冊』による「手帳六」の翻刻を併記し、現行版『全集』第二十三巻のページ番号も記した。

一、「元版全集」に収録のない箇所や、句読点を含めて異同がある箇所は赤字で示し、そのほかは黒字で示した。

一、底本には全ページの通し番号がないが、便宜上右開きの最初のページから順に私にページ番号を付した。なお、芥川は左開きのものとして後部空白ページからメモを記入していた。

一、改行・挿入記号・挿絵・挿絵の注記などは、可能な限り底本のまま翻刻した。

一、底本で旧字・異体字が使用されている場合、可能な限り底本通りに翻刻した。略字は通行の字体として翻刻した。なお、同一の漢字の字体の差異に関しては、「元版全集」との異同に計上していない。

一、翻刻に際し、判読できない部分は「□」で示した。判読できず、かつ文字数も不明の箇所は、「[約一行不明]」のように示した。

一、存疑の箇所は網かけで表した。

にしきへび　　□□　かはせみ

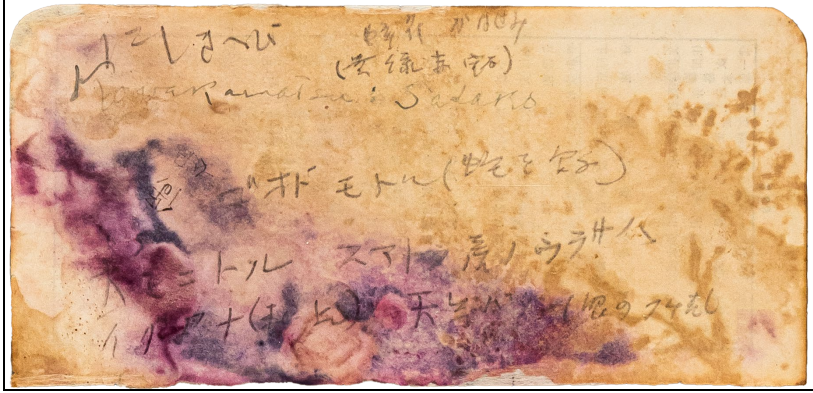
（黄緑赤宝石）

Kowaramaisu : Sadako

無　ゴオド　モトル（蛇を食ふ）

大モニトル　スマトラ産ノウラサハ

イリアナ（□□）　天□バタン（眼のフチ無し



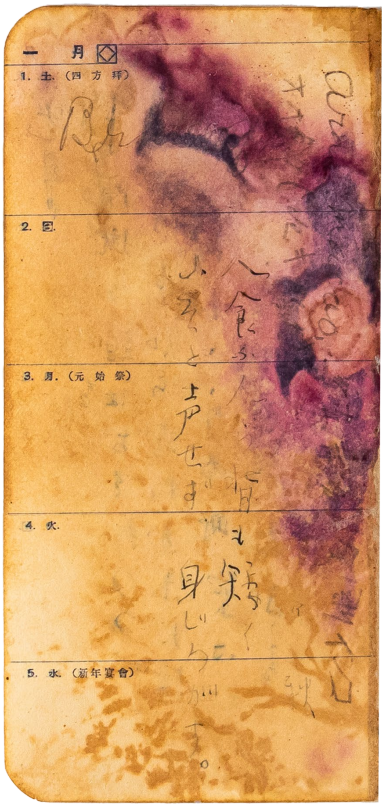
28

全集未収録

Ara macao、（赤青□金剛インコ
オオガタ（□キ□□）　秋

人食ふ人ら背も矮く
ひそと声せず、　身じろがす。

Br［約一行不明］

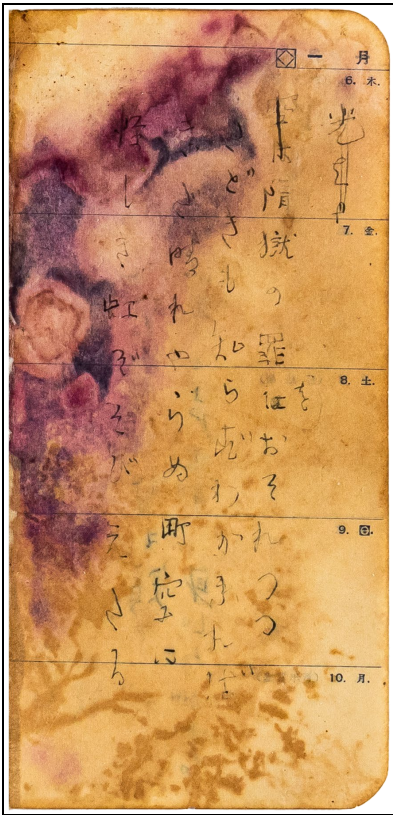



33

○人食ふ人ら背も矮く、ひそと聲せず、身じろがず。

元版 p815/現行版 p376

光は□
空は隋獄の罪をおそれつつ
たどきも知らずわが来れば
まだ晴れやらぬ町空に
怪しき虹ぞそびえたる



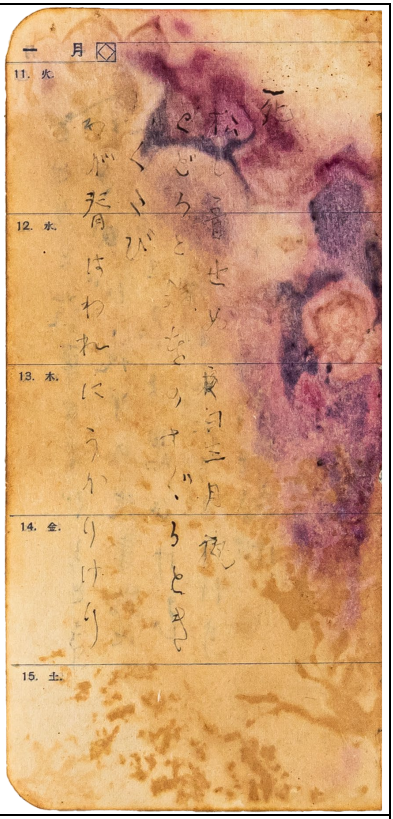

34

○墮獄の罪をおそれつつ
たどきも知らずわが來れば
まだ晴れやらぬ町空に
怪しき虹ぞそびえたる

元版 p815/現行版 p375～376

死

松も音せぬ　中星月夜
とどろと汽車のすぐるとき
いくたび
わが脊はわれにうかりけり

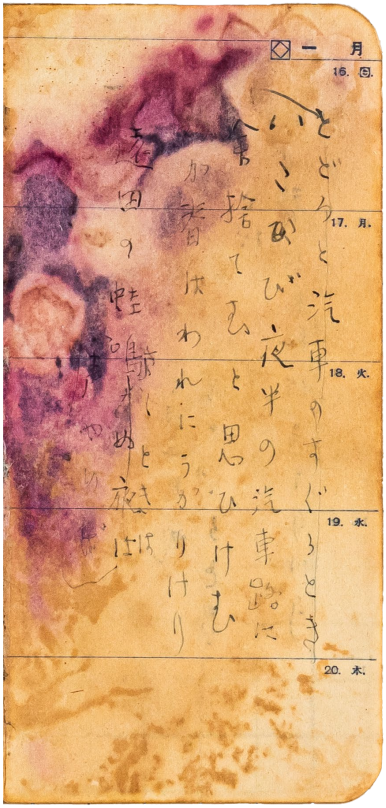



35

○松も音せぬ星月夜
とどろと汽車のすぐるとき
いくたび
わが脊はわれにうかりけり

元版 p814～815/現行版 p375

とどろと汽車のすぐるとき
いた中び夜半の汽車路に
命捨てむと思ひけむ
わが脊はわれにうかりけり
きくときは
遠田の蛙鳴かぬ夜は
声やめば

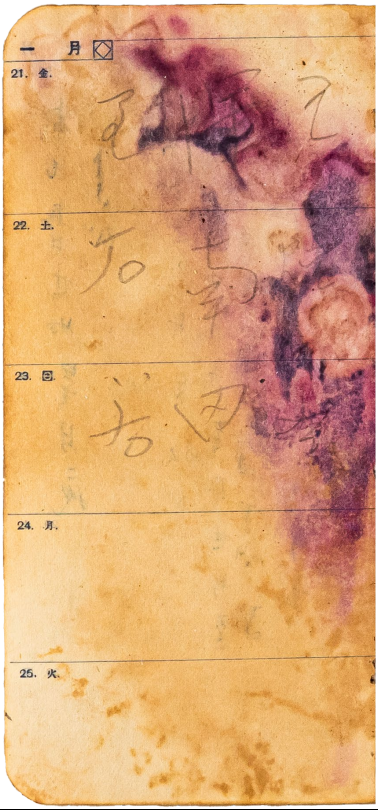



36

○遠田の蛙きくときは（聲やめば）
いくたび夜半の汽車路に
命捨てむと思ひけむ
わが脊はわれにうかりけり

元版 p814/現行版 p375

王煙客
惲南田
王石谷



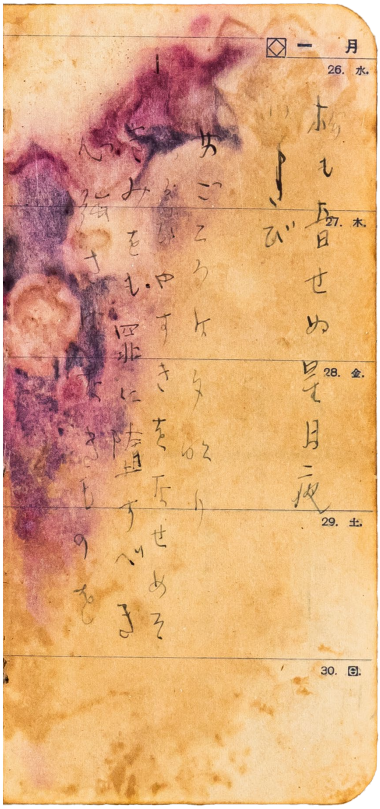

37

全集未収録

【王石谷、惲南田、王煙客】いずれも「秋山図」（「改造」、大十・一）の登場人物で、中国・明末清初の画家。なお「王煙客」・「王石谷」・「惲南田」への言及が、大正九年十二月七日の小穴隆一・佐佐木茂索宛書簡にも確認できる。

松も音せぬ星月夜
いくたび

女ごころは夕明り
來るひやすきをなせめそ
きみをも罪に墮すべき
心強さはなきものを



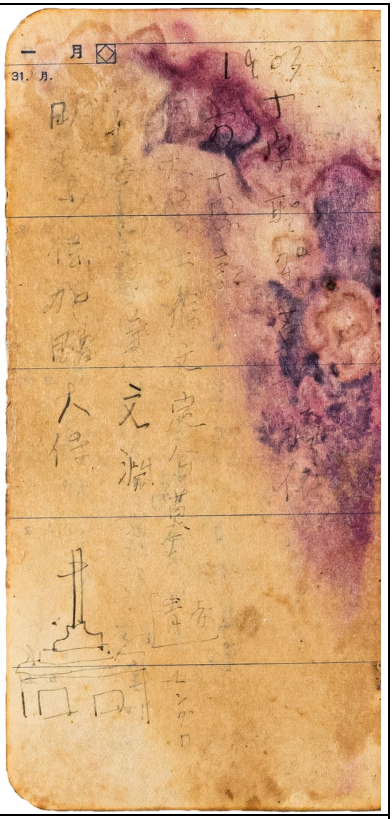

38

○女ごころは夕明り
くるひやすきをなせめそ
きみをも罪に墮すべき
心強さはなきものを

元版 p814/現行版 p375

1903
十字聖架萬世瞻依
前十字記
閣大学士徐文定公墓
礼部尚書兼文淵
明故少保加贈大保

青赤
レングワ

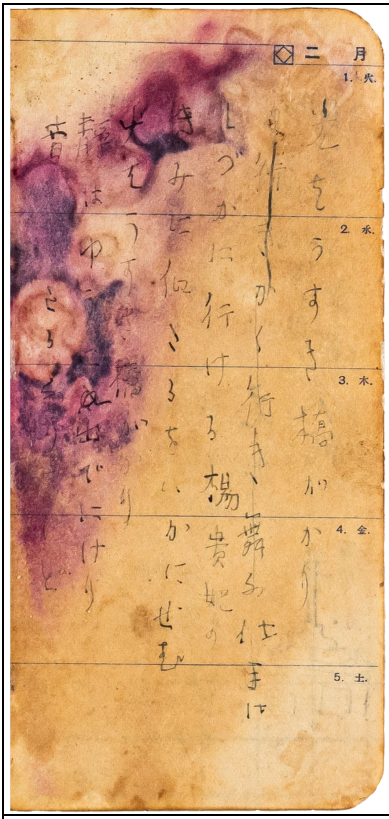



39

全集未収録

【「上海游記」二十　徐家滙】

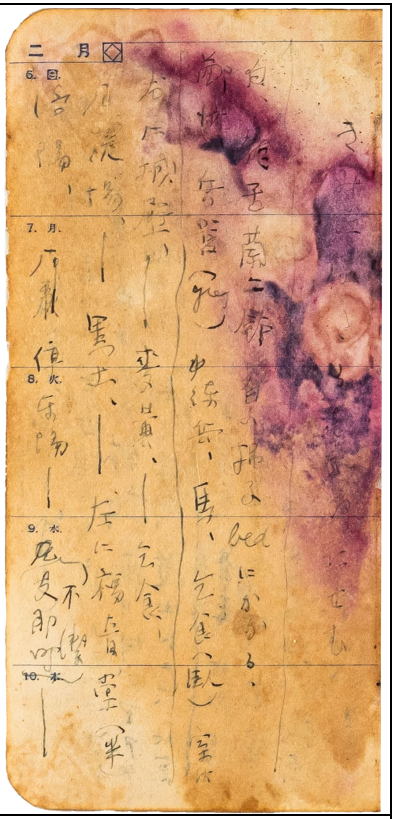
光はうすき橋がかり
か行きかく行き舞ふ仕手は
しづかに行ける楊貴妃の
きみに似たるをいかにせむ
光はうすき橋がかり
静はゆうに木出でにけり
昔めきたるふりなれど




40

○光はうすき橋がかり
か行きかく行き舞ふ仕手は
しづかに行ける楊貴妃の
きみに似たるをいかにせむ
○光はうすき橋がかり
静はゆうに出でにけり
昔めきたるふりなれど

元版 p813～814/現行版 p374~375



41

○洛陽。停車場――支那町。不潔――石炭場――黒土――左に福音堂（米）、右に城壁――麥黄――乞食。

○鄭州。兵營（grey）。練兵。馬。乞食（臥）。室は白。龍舌蘭二鉢。白い拂子 bed にかかる。

きみに似たるを如何にせむ

元版 p813～814/現行版 p374～375

きみに似たるを如何にせむ

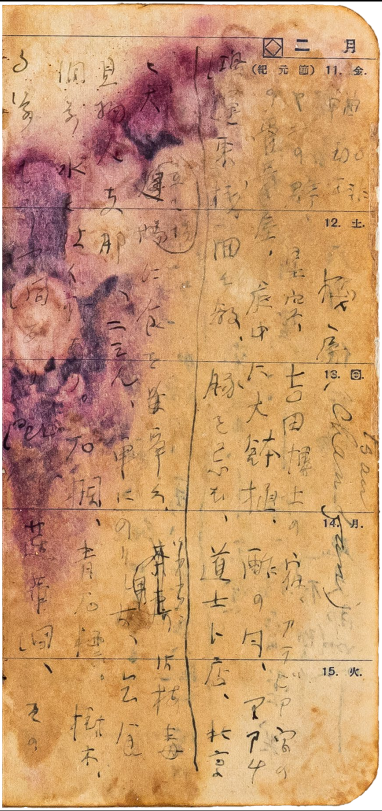
白、龍舌蘭二鉢　白の拂子 bed にかかる。

鄭州、兵營（grey）、中練兵、馬、乞食（臥）　室は

右に城壁、――麥黄、――乞食、

石炭場、――黒土、――左に福音堂（米）

洛陽、石炭　停車場――中　不潔　支那町――




42

tsan
軸　珈琲　桟房（Chan Fan）
ヤンの群、星空、吉田博士の宿、アラビヤ字の
の骨董屋、庭中に大鉢植、酢の匂、リアチ
鴻運東桟田々教、豚を忌む、道士卜店、北京

立て場　~~中アファン~~
と犬と建場に食を中争ふ、茶房は梅毒
男
見物人支那人二三人、車にのりし女、乞食
洞前水を吐く所あり。石欄、青石標。樹木、
る前もう一洞あり。Per haps 蓮華洞、その

る前もう一洞あり。perhaps 蓮華洞。その
洞前水を吐く所あり。石欄。青石標。樹木。
見物人支那人二三人。車にのりし女。乞食
と犬と立て場に食を争ふ。男は梅毒。
〇鴻運東桟回々教。豚を忌む。道士卜店。
北京の骨董屋。庭中に大鉢植。酢の匂。マ
アチヤンの群。星空。吉田博士の宿。アラ
ビヤ字の軸。珈琲。桟房 Chan (tsan) fan.

元版 p813/現行版 p374

左の洞に竈あり、煙る事最甚し。洞に至
寺あり　賓陽三洞（案内人曰　中央ハ中央、右ハ
右云々
洛伊水の渡し――伊水、対岸に香山
入れたもの（チマキ式）　茹玉子、魚の油揚
天井あり　焼餅（シヤオビン）、麻餅（マアビン）（汽車中）　糯の中に棗を
る　立て場の屋前　葭天井あり　刈しままの黍
如し、（村四つ）裸の子供　皆指爪をいぢ

43

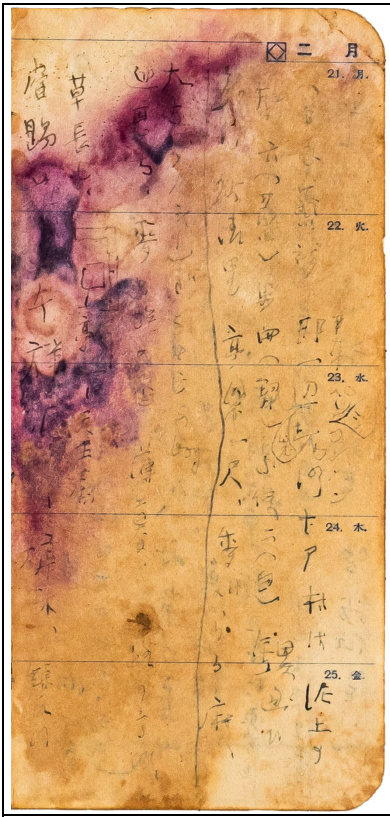
如し（村四つ）。裸の子供、皆指爪をいぢる。立て場の屋前、葭天井あり。刈しままの黍天井あり。焼餅（シヤオビン）。麻餅（マアビン）（汽車中）、糯の中に棗を入れしもの（チマキ式）。茹玉子。魚の油揚。
○洛水の渡し――伊水。對岸に香山寺あり。賓陽三洞（案内人曰中央ハ中央、右ハ右云々）。左の洞に竈あり、燻る事最甚し。洞に至

元版 p813/現行版 p374

（白衣藍袴）那一辺龍門　十戸村は泥上の
中ナイヘンロンメン　シ　是
驢六（藍）男四（鼠）小使二（白）　騾逐ひ
龍門　25 清里　高粱一尺、麥刈らる　麻、

大寺（タアシイ）だとも云ふ　boy
迎恩寺、麥の埃の香　薄暮、　路の高低
草長し、

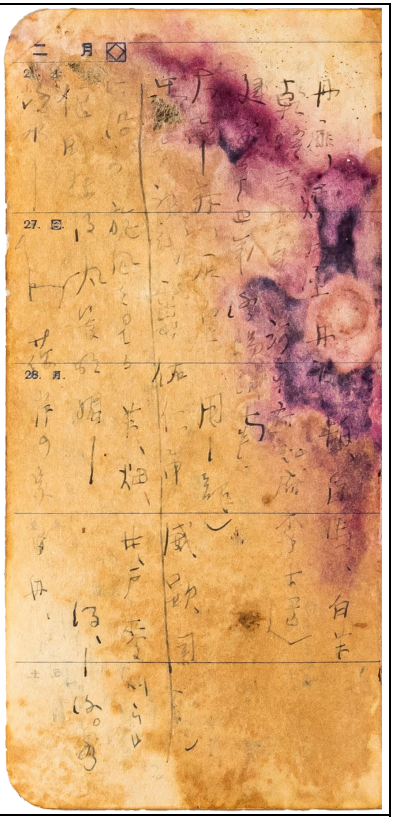
—天王殿
亭
睿賜護國千祥庵　、碑林、煉瓦門




44

○睿賜護國千祥庵。碑林。煉瓦門。草長し。
○迎恩寺。麥の埃の香。薄暮。路の高低。
大寺（タアシイ）だと云ふ boy.
○龍門。25 清里。高粱一尺。麥刈らる。麻。
驢六（藍）。歩四（鼠）。小使二（白）。騾逐
ひ(白衣藍袴)。那一邊是龍門○十戸村は
泥上の

元版 p813/現行版 p373～374



45

○洛水。蘇岸の家。舟。偃師縣後風景明媚。——後、洛水に沿ふ。旋風を見る。羊。畑。井戸。麥刈らる。

○忠義神武靈佑仁勇威顯關聖大帝林。（石亀。圍——龍。）建安二十四年洛陽城南。○乾隆三十三年河南府知府李士适。○丹扉。煉瓦壁。丹柵。柏。白馬。白羊。

元版 p812～813/現行版 p373

丹扉、煉瓦壁　丹柵　柏、白馬、白羊

乾隆三十三年　河南府知府李士适

建安二十四年洛陽城南

大帝林（石亀　用—龍）、

忠義神武靈佑仁勇威顯関聖

に沿ふ　旋風を見る　羊、畑、井、戸　麥刈らる

偃師縣後風景明媚——　・　後、——洛水

洛水——

護岸の家　中舟、

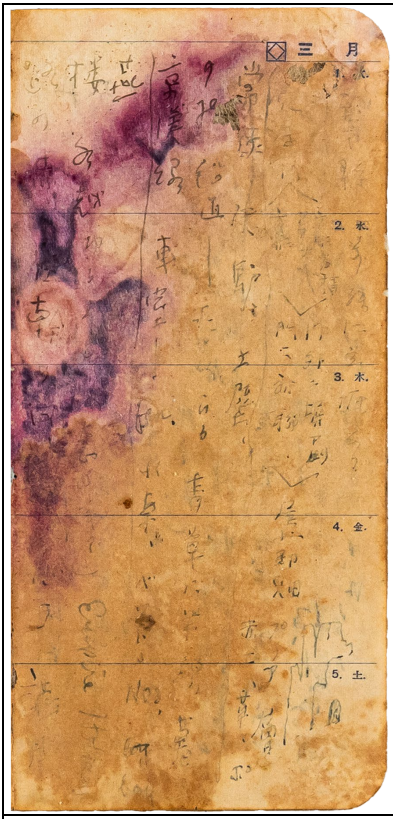
【「雑信一束」八　京漢鉄道】

鞏縣前殊に立派なり

穴居門　方形石積
アアチ　方形
門外ニ塀アリ
門ニ対聯
屋上即畑
ポプラア　層
赤土、草、ポ

常緑　牛、驢、土壁、
のみ　沿道——麥刈らる　青草に羊群　墓の
京漢線　車室——fan.　小卓、ベッド□
No3.
~~boy~~
boy

燕
楼　水越ゆる事あり（大正四年？）　Empire Holiday
路の赤　樹幹の白、垣のバラ　讌月




46

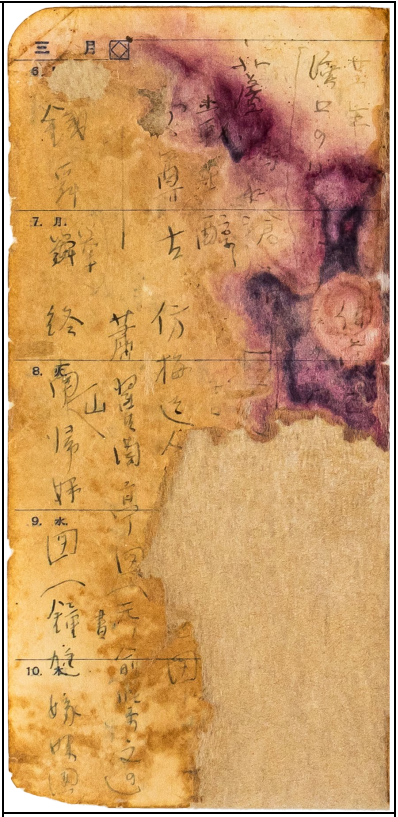
路の赤。樹幹の白。垣のバラ。讌月楼。水越ゆる事あり（大正四年？）。Empire Holiday. 燕。
○京漢線。車室——fan. 小卓。ベッドNo 3. boyの□。沿道——麥刈らる。青草に羊群。墓の常緑。牛。驢。土壁。
○穴居門。方形アアチ、方形石積。門ニ對聯。門外ニ塀アリ。屋上即畑。○赤土。草。ポプラア。層。○鞏縣前殊に立派なり。

元版 p812/現行版 p373

芝生　ベンチ　佛蘭西。
漢口のバンド、プラタナ

蘆鴻□滄館
戴士醇　書
黄尊古　仿梅道人　図

蕭翼蘭亭図（元ノ兪紫文の書）
錢舜□　挙
終南帰妹図（鍾馗嫁妹図）
山



47

○錢舜擧、終南山歸妹圖（鍾馗嫁妹圖）○錢舜擧、蕭翼蘭亭圖（元ノ兪紫文の書）○黄尊古、仿梅道人江山秋色圖○載士醇○蘆鴻滄館○曾國藩。日本畫の猿。安思翁？
○漢口のバンド。プラタナス。アカシア。（支那人不可入）芝生。ベンチ。佛蘭西水兵。印度巡査。

元版 p812/現行版 p373

子供

乞食　臥老人。夜あひし乞童、全裸体

讀

服　、修身、□本、先生白

災童收容所　右胸に　札、

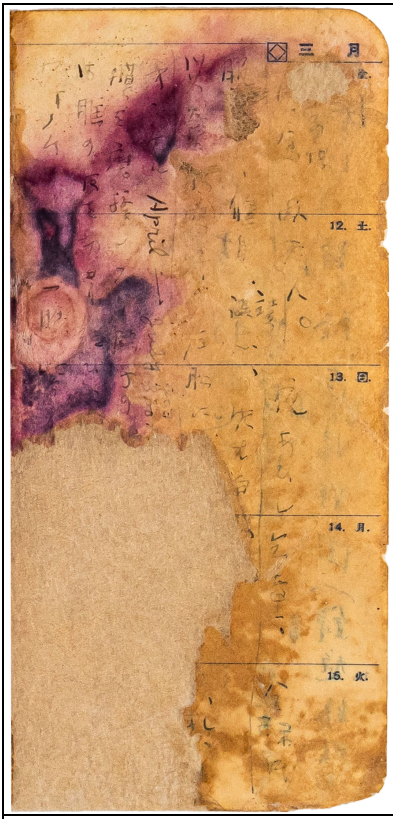
平均

ヤンケル　April——July　300 人

膜を磨擦しスリ硝子の

は眶の皮を切□り縫ひ上

フォームの老婆　一眼紫色




48

フォームの老婆、一眼紫色、一眼治療前。治療は眶の皮を切り縫ひ上ぐ。for 睫毛内面にむき角膜を磨擦しスリ硝子の如くすればなり。兵士のシヤンケル、April—July, 平均 300 人。(April—May, 149. 新舊合せて)

○災童收容所。右胸に姓名を書きし紙札。

白服。算、修身、讀本。先生白服。

○乞食、臥老人。夜あひし乞童、全裸體の子供。

元版 p812/現行版 p372～373

49

○酒じみの疊に蚊たかり居る空き間。
○西村が文鳥の占を見て貰ふ。
○支那富豪金を銅貨にし（37 俵）貯ふ。銀行はつぶるる故。
○鄭州。早川。島田。日華實業協會。災民施療所。（doc. 二人、Nurse 一人）（nurse 二人 shankel）トラフオーム、75％（内地は15％）膀胱結石、（二つ、一は大福大）、兵士多し。トラ

元版 p811～812/現行版 p372

膀胱結石（二つ　一は大福大）兵士多し　トラ

所（doc's 二人　Nurse 一人）（nurse 二人　schanker）は 15％
トラフォーム 75％　内地

鄭州

日

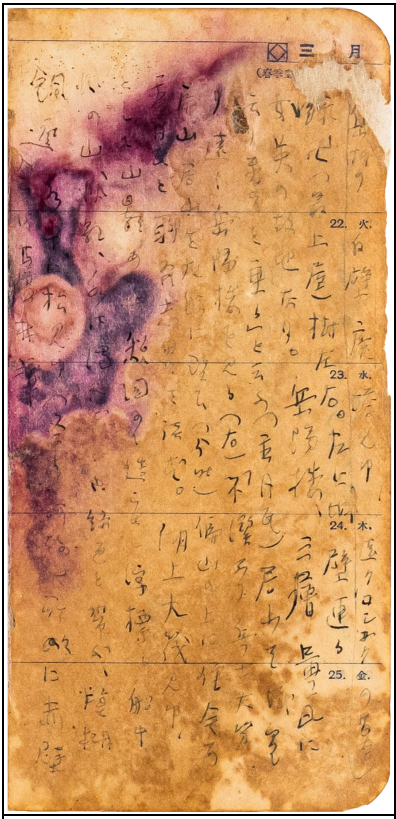
早川、島田、中華実業協会、災民施療

銀行はつぶるる故、
支那富豪　金を銅貨にし（37 俵）貯ふ
西村が文鳥の占を見て貰ふ
間
酒じみの畳に蚊たかり居る空き

岳州の　白壁　廃塔みゆ　遠クロン□クの□□

綠卍（最上屋）樹左右。左に城壁連る
女英の故地なり。岳陽楼、三層　黄瓦に
云り糞を垂る」と云ふ（香月氏）君山は娥皇
り　遠く岳陽楼をみる（右）「不潔なり　兵士大勢
扁山君山を左舷に望む（5時）偏山の上に僧舎あ
香月氏と聊斎志異を談ず。湖上大筏みゆ、
として山影あり　税関にて造らせし浮標。船中
風の山、帆影、水は濁れどやや綠色を帯ぶ、糢糊
々

銅庭　水中に松みゆ（冬は河故）所中に赤壁
入口は蘆林潭

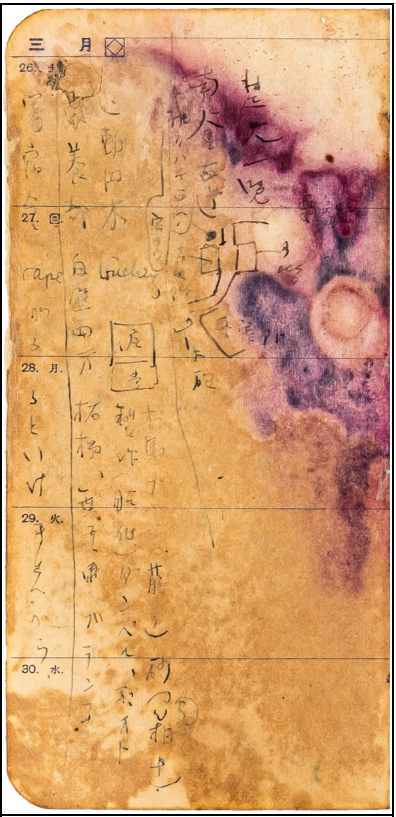


50

【「雑信一束」五　洞庭湖】
【娥皇女英】娥皇、女英は、堯の長女と次女。ともに舜の妻となった。

○洞庭。入口は蘆林潭。水中に松見ゆ（冬は河故）。所々に赤壁風の山。帆影。水は濁れどやや綠色を帯ぶ。糢糊として山影あり。税關にて造らせし浮標。船中香月氏と聊齋志異を談ず。湖上大筏見ゆ。扁山君山を左舷に望む。（五時）。偏山の上に僧舎あり。遠く岳陽楼を見る（右）。「不潔なり。兵士大勢居り糞を垂る」と云ふ（香月氏）。君山は娥皇女英の故地なり。岳州の白壁癈塔見ゆ。岳陽楼。三層。黄瓦に綠卍（最上屋）。樹左右。左に城壁連る。

元版 p811/現行版 p372




楚天一覽
南登古道
桃クハヰ西□
□3ツ
3階
要塞路
3階
大砲
要塞門
小庭
堂
大
遊動円木
touching
蒙養部　白壁四方　柘榴、無花果　ブランコ
木馬ブラン（藤の）砂（箱中）
製作（貼紙）ダンベル、ボオト
寄宿舎　rape があるといけませんから、

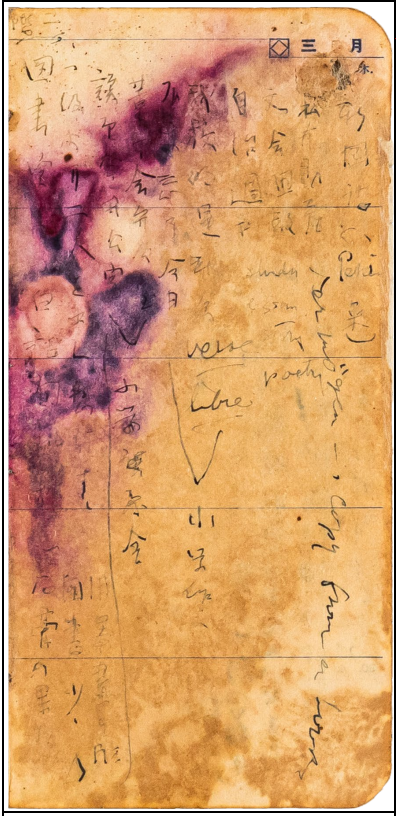
51

○寄宿舎。rape があるといけませんから。
○蒙養部。白壁四方。柘榴、無花果、ブランコ、遊動圓木（touching）、製作（貼紙）、ダンベル、ボオト、木馬、ブラン（藤の）、砂（大箱中）。

【「雜信一束」七　學校】
【楚天一覽】長沙天心閣の額。

元版 p811/現行版 p372

新国語（Peking 来）
私有財産　Vermögen—,Copy from a book
文会週報
自治週刊　study　essay　story　poetry
我校的運動会　verse libre
不要忘了今日
董事会弁公室
議事会弁公室
小学□義会
用器畫の形
一級より二人を出し整理す、
図書　少、
二階
図書室　女子白話旬報（机上）
石膏の果物

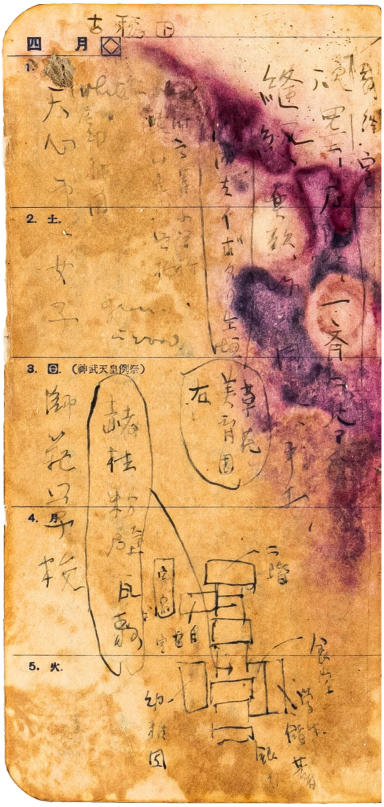


52

【「雑信一束」七　學校】

○二階。裁縫室。圖書室。女子白話旬報（机上）。石膏の果物。圖書少。用器畫の形。一級より二人を出し整理す。○議事會辦公室、董事會辦公室——小學義會。○不要忘了今日。我校的運動會（verse libre）。——小學作文。○自治週刊。文會週報○study, essay, story, poetry. ○私有財産 Vermögen——Copy from a book. 新國語（Peking 來）。

元版 p811/現行版 p371～372



53

○天心第一女子師範學校。古稲田。white in black. 附屬幼稚園。附屬高等小學校、國民學校。green in wood. 門内はイボタの生垣。右美育園、草花。○縫紉、樂歌、作文、國文、手工。硯墨、石磐、一齊に答ふ。

元版 p811/現行版 p371

裁縫室

硯墨、石磐、一齊に答ふ

縫紉、樂歌、作文、国文、手工、

門内はイボタの生垣

古稲田

white in black

属附 高等小学校

属附 国民学校

属附 幼稚園

天心第一女子師範学校

green

in wood

右 美育園

草花

二階

椿柱粉壁瓦敷

寄宿

自習室

食堂

学生

幼稚園

儲蓄

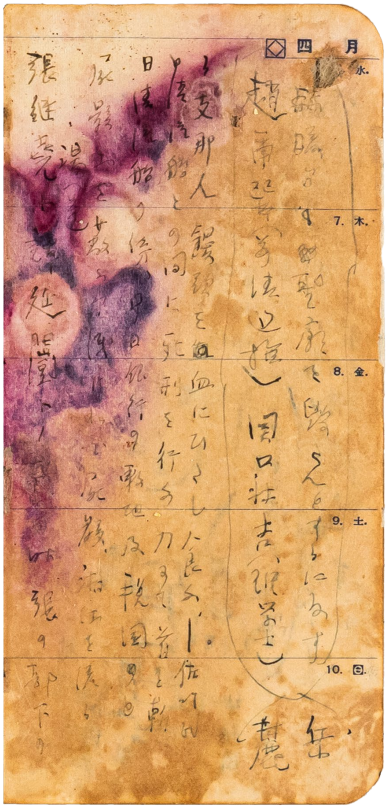
銀行

【「雜信一束」七　學校、「湖南の扇」】

【「雑信一束」六　長沙、「湖南の扇」】

赫曦台も中聖廟を毀たんとするに反す　岳
趙爾巽（前清巡撫）　関口壯吉（理学士）　麓

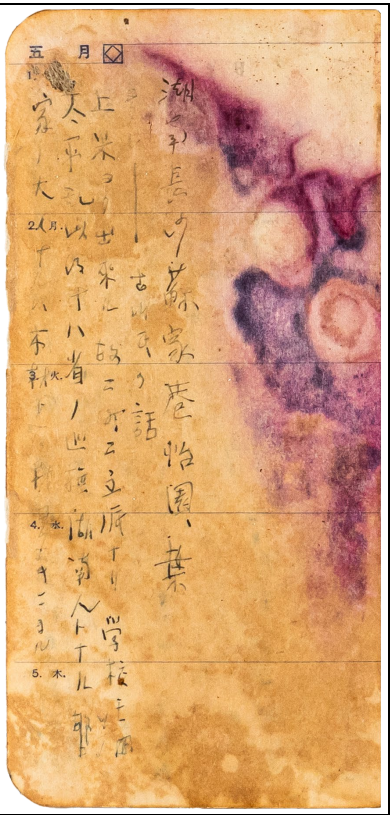
る　支那人　饅頭を血血にひたし食ふ。――佐竹氏
日清汽船との間に　死刑を行ふ　刀にて首を斬
日清汽船の傍、中日銀行の敷地及税関ゆと
屍骸土を蔽ふ事浅ければ屍骸湘江を流る
湯（弟）
張継堯ト譚延闓トノ戦の時　張の部下の



54

○張繼堯〔湯（弟）〕ト譚延闓トノ戦の時張の部下の屍骸土を蔽ふ事淺ければ屍骸湘江を流る。
○日清汽船の傍、中日銀行の敷地及税關と日清汽船との間に死刑を行ふ。刀にて首を斬る。支那人饅頭を血にひたし食ふ。――佐野氏。
○趙爾巽（前清巡撫）。關口壯吉（理學士）。赫曦臺も聖廟を毀たんとするに反す。麓岳。

元版 p810～811/現行版 p371



59

湖南長沙蘇家巷怡園、葉
多シ――古川氏の話
上米ヨク出來ル　故ニ町ニ立派ナリ　学校モ中
ソノ
太平乱以後十八省ノ巡撫湖南人トナル　故十
家ノ大イナルハ木材ト石材多キニヨル

○家ノ大イナルハ木材ト石材多キニヨル。
○大平亂以後十八省ノ巡撫湖南人トナル。
ソノ上米ヨク出來ル。故ニ町立派ナリ。學校モ多シ。――古川氏の話。
○湖南長沙蘇家巷怡園。葉。

元版 p810/現行版 p371

画像

入口、門（黒）石敷、植木鉢、室　興　四五（緑色の蔽）皇帝

高イ墻の屋根ニ小サナ木ガ生ヘテイル

板木ニ朱ト黒ト二種アリ、

コ　臺　字　幅

水盤ニ石　ス　室　架

ム

ノランプアリ、

燈籠イクツモ下ル　マン中に眞□□

ココヨリ二階ニ上ル

紫檀の卓椅子

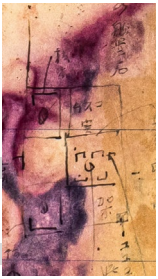
ノ感ジ

白壁、甎、天井高し　伽藍

□木

了

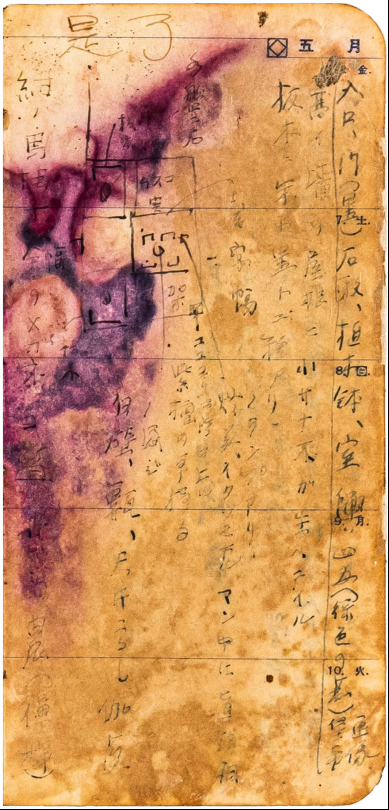
是



幅

□木

紺ノ馬掛子　金のメガネ　白皙　葉尚農（德輝）

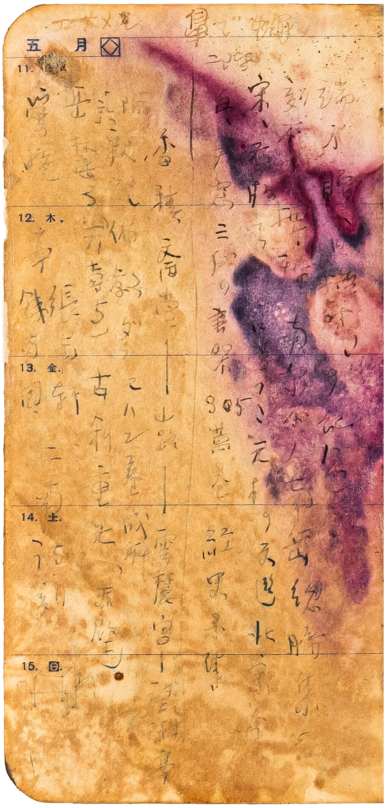


60

【湖南の扇】

○紺ノ馬掛子。金のメガネ。白皙。葉尚農（德輝）。○白壁。甎。天井高し。伽藍ノ感ジ。○板木ニ朱ト黒ト二種アリ。○高イ墻の屋根ニ小サナ木ガ生エテヰル。○入口。門（黒）。石敷。植木鉢。室興四五（緑色の蔽）。皇帝畫像。

元版 p810/現行版 p371




61

○愛晩亭。錢南園、張南軒、二南詩刻。○岳麓寺（万壽寺）。古刹重光（赤壁）。設所釋氏佈教ダンモハン養成所。香積齋堂。山路。雲麓宮。望湘亭。

○二階。白。天窓。三段の書架。35万巻。經史子集。宋、元板は上海に送つた。元板の文選、北宋金刻本の捭雅、南宋本ノ南岳。總勝集、端方贈（巡撫時代の紀念）。

元版 p810/現行版 p370～371

鼻で蠅

エナメル

二階

端方贈（巡撫時代の紀念）

刻本の捭雅　南宋本ノ南岳總勝集も

宋、元版は上海に送つた　元板の文選　北宋金

白、天窓　三段の書架　3~~0~~5　萬巻　経史子集

香積齋堂——山路——雲麓宮—望湘亭

所　釈氏佈教ダンモハン養成所

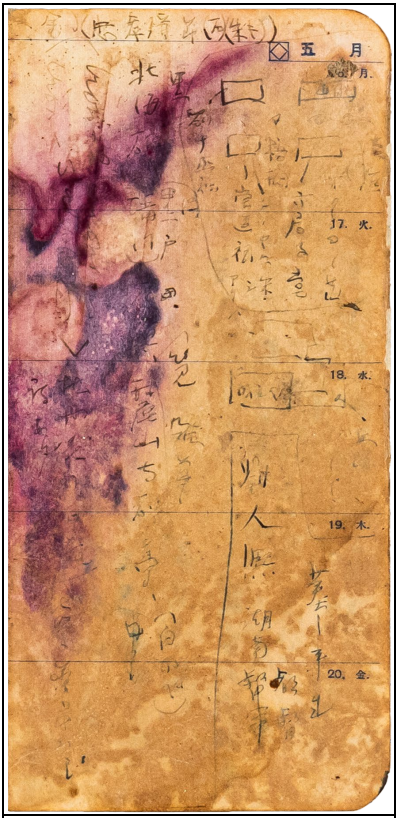
設

岳麓寺（万寿寺）古刹重光（赤壁）

愛晩亭　張南軒

錢南園　二南詩刻

【湖南の扇】



62

へ金）（忠孝廉節（石）（朱キ））

芭蕉
ザクロノ花
六君子堂
梧桐　コノ中ニ朱シアリ
崇道祠
劉中丞祠

黒
黒戸
に
申、
筧　雑草
北海碑（墻門）石階、麓山寺碑亭、（白かべ）
（中も）

iron-ammonium
iron-sulphite
牡丹花の白瓶
詩あり
化学薬品室

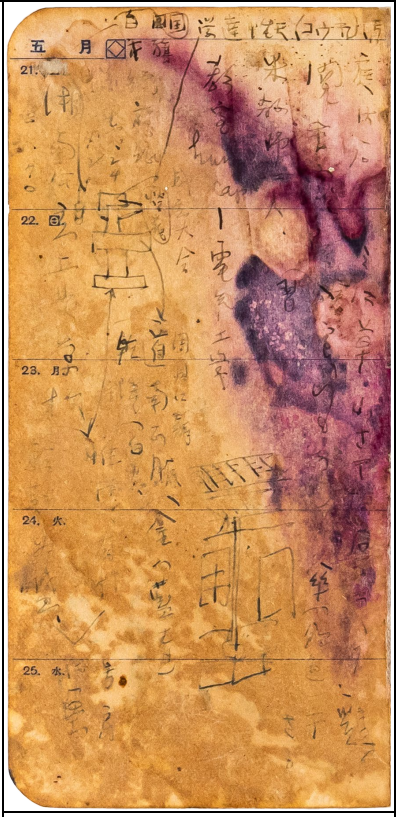
成立□□

丘塚

墓―半□
都督
劉人熙　湖南督軍

○化學藥品室。iron-humonium, iron-salphate. 牡丹花の白瓶、詩あり。○北海碑（墻門）。石階。筧。雑草。麓山寺碑亭（白かべ）。○劉中丞祠。崇道祠（コノ中ニ朱シアリ）。六君子堂。梧桐。芭蕉。ザクロノ花。○劉人熙。湖南督軍都督。墓――半成。

元版 p810/現行版 p370



63

○湘南公立工業學校。惟楚有材、於斯爲盛——白堊号房。○成立大會。○學達性天（コウキ）（青へ金）○日本國旗。紙旗。紙花。黑ベンチ。白エンダン。○道南正脈、（金へ藍青）、乾隆（白カベ）。周圍に龍。○教室。hunting Cap. 電氣工學。○米教師二人。○閱書室。實習室（何もなし）。○庭は石ダタミに草。小さキ桐。石上ニハフ鶏。傘（飴色）干さる。

元版 p809～810/現行版 p370

庭は石ダタミに草　小さキ桐　石上ニハフ鶏

（青

（コウキ）

学達性天

閱書室　実習室（何もなし

米教師二人、

教室

hunting

cap

—電気工学

成立大会

傘（飴色）　干さる

国

日本　旗

紙旗　紙

花　黒ベンチ

白エンダン

湘南公立工業学校

白へクロ

燈籠

周囲に龍

道南正脈（金へ藍青）

乾隆（白カベ）

惟楚有材

於斯為盛、

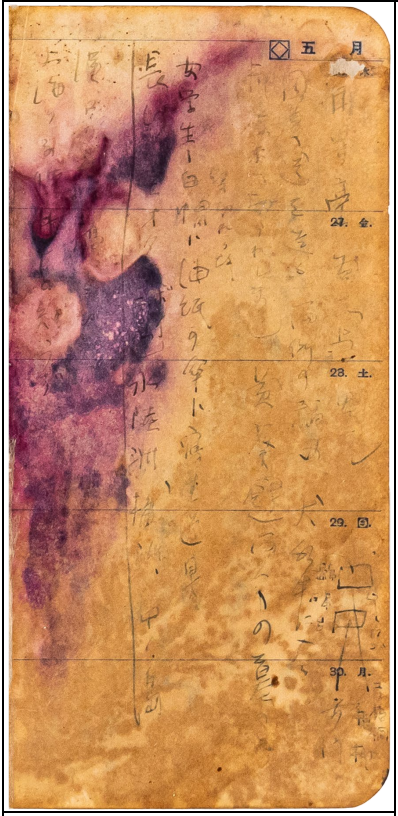
号房

白堊

【「湖南の扇」】

自卑亭　黄瓦上ニ黒瓦
国費、道を造る　両側の稲田　犬水中に入る
柳並木（切られしまト）黄蔡（鍔）両人□の墓の為
髪切れる故、
女学生—白帽ト油紙の傘ト寫生道具、
長沙　モオタア（ボイ二人）水陸洲、橘洲、中ノ島

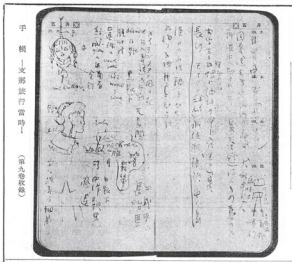
漢口の子供橋を知らず
上海の子供井戸を知らず




64

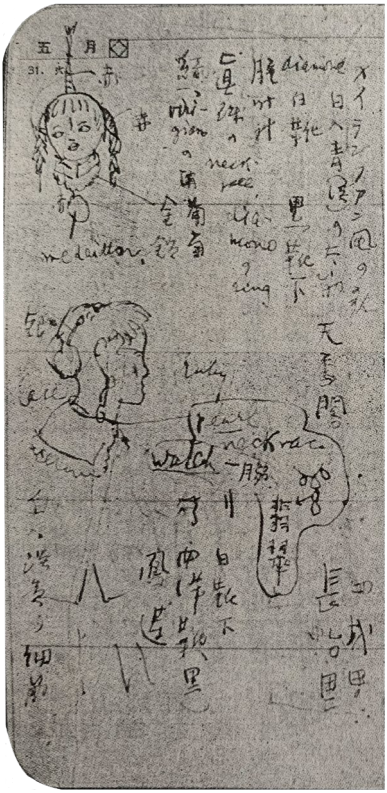
【湖南の扇】

昭和十年三月に刊行された「普及版全集」の「月報」第五号に、次の五十ページとともに写真（下図）が掲載されている。写真の左側に、「手帳—支那旅行當時—（第九巻収録）」と記されているが、第九巻の「手帳より」の中には、ほかの手帳が一部翻刻されているのに対し、中国旅行関係の「手帳六、七」は一切収録されていない。



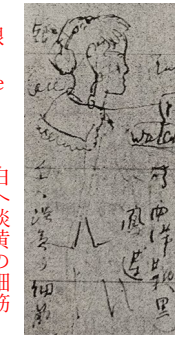

○上海の子供井戸を知らず。漢口の子供橋を知らず。
○長沙。モオタア（ボイ二人）。水陸洲。橘洲。中ノ島。○女學生——白帽、髪切れる故——油紙の傘——寫生道具。○柳並木（切られしまま）。黄蔡（鍔）兩人の墓の爲國費、道を造る。兩側の稲田。犬水中に入る。○自卑亭。黄瓦上ニ黒瓦。

元版 p809/現行版 p370



65

メイランフアン風の歌
白へ青（淡）の太筋　天香閣
diamond　白靴　黒靴下
腕時計
眞珠の neck race. dia-mond の ring
緑（viri-gian の葡萄
赤　赤　赤　金鎖
medaillon.



ruby
pearl
neck race.
watch－腕
翡翠
ア　リ
四成里
長怡里
白靴下
西洋靴（黒）
鳳蓮
銀
lace
白へ淡黄の細筋

○緑 virigian の葡萄。眞珠の neckrace. diamond の ring. 腕時計 diamond. medaillon 金鎖、白靴。黒靴下。白へ青（淡）の太筋。メイランフアン風の歌。○鳳蓮。西洋靴（黒）。白靴下。

元版 p809/現行版 p370

同前、昭和十年三月に刊行された「普及版全集」の「月報」第五号より写真を引用。本ページは、藤沢市文書館に所蔵されている「手帳六」の原資料に現存しないが、内容は「元版全集」に翻刻されている。昭和十年以降、手帳が寄贈されるまでの間に散逸したか。

欠損

66

【「雑信一束」四　古琴臺】

○兵工局。槍礮局。煙突林立。○月湖、アシ、ハス、汚。曇天胡蝶。
○陸――町――舟（豕聲、芥山）――漢江、泥流に犬の屍骸。

元版 p809/現行版 p370

梧　桐

双樹――白壁に梧桐　亭―堂　女学生

舟　古琴台（金　群青）の額　煙草廣告　山水清音ノ額

□□、　□

廉　李鴻章と合はず　排日　後ニ親日

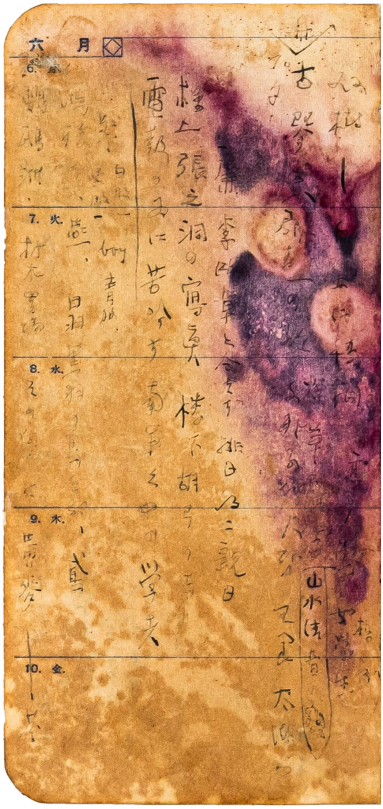
楼上張之洞の寫眞　楼下胡弓の声

電報の為に苦吟す　南軍々中の学者

巡警（白服一　黒服一）　boy　青服。

酒楼中へ燕、白羽、黒羽の鳥とぶ、鳶

鸚鵡洲・材木置場　その向うは黄麥――茶



67

鸚鵡洲、材木置場。その向うは黄麥。――酒楼中へ燕。白羽黒羽の鳥とぶ。鳶。○巡警、白服一、黒服一。boy 青服。

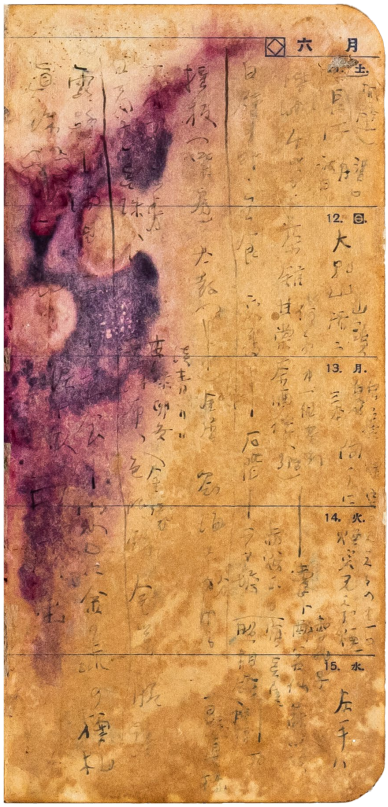
○電報の爲に苦吟す。南軍々中の學者。○楼上張之洞の寫眞。楼下胡弓の聲。○廉、李鴻章と合はず。排日。後ニ親日。

○古琴臺（金、群青）の額。舟。支那子供大勢。乞食。太湖石。煙草廣告。双樹――白壁に梧桐。亭――堂。山水清音ノ額。女學生。梧桐。

元版 p809/現行版 p369～370

【「雑信一束」三　黄鶴楼、四　古琴臺】

城壁　漢口　禹廟　煙突の見えるのも一つ
長江　舟　山頭　白壁　向うに煙突見えず煙　左手ハ
波白　大別山　樹二三本　雲龍子
階　total 4 or 5.　茶舘　何とか第一倶楽部　——賣女ト醉翁仙蘇小坡
甘棠茶酒楼（階 3）
赤煉瓦の寫眞屋
白壁の町・乞食　交番——石階——ラマ塔　照相舘　惟精——石
顯眞楼
撞板（紫房）　太鼓（ ）金属　劉海を中分ける
淡青〃〃
一対づつ両房　中緑卵黄　金緑
白蘭花眞珠、下げず　西洋布、色眼鏡　金歯　腕輪
露路——両側の車——乞食——家口に金の赤の標札
眞珠　 　泥中臥　四成里
西庇




68

【「雑信一束」三　黄鶴楼】

○露地——兩側ノ車——乞食、泥中臥——家口に金の赤の標札、眞珠、西洋庇。（四成里）
○白蘭花眞珠一對づつ兩房、下げず、西洋布（緑卵黄、淡青卵黄）、金緑色眼鏡、金歯、腕輪、撞板（紫房）、太鼓（金屬）、劉海を分ける
○白壁の町。乞食。交番。——石階。——ラマ塔。赤煉瓦の寫眞屋、昭相館、（惟精顯眞楼）——石階 total 4 or 5. 茶館、甘棠茶酒楼（三階）。何とか第一倶樂部。——賣女——醉翁仙、蘇小坡、雲龍子。城壁、長江（漢口、舟、波白）。大別山、山頭樹二三本。禹廟、白壁。向うに煙突見えず、煙。煙突の見えるのも一つ。左手ハ

元版 p808～809/現行版 p369

小卓の下ニ銀色の啖壺

—戸上に青—電燈2個。—入口に帽子かけ机（ウと並ぶ）、鏡、置時計、引き出し、—戸青挟む）マホガニイ紛ひ、—大卓（中央）同上、—中ウアド、紫檀彫、戸に鏡、—椅子（壁側）（小卓を香烟廣告の娘々—寝床白キヤノピイ、夏蚊帳—山水の畫4壁青—帷白—床リノリウム—額寫眞金黒

—川に赤き旗の小蒸汽—夏は水かぶる

人家の壁白—黄州の城壁、—稍遠くに西洋舘

boy来る—雨—麥黄、柳と民家、—崖赤、草青

69

○boy来る—雨—麥黄、柳と民家、—崖赤、草青—人家の壁白—黄州の城壁—稍遠くに西洋館—川に赤き旗の小蒸汽—夏は水かぶる

○壁青—帷白—床リノリウム—額山水の畫4、寫眞金黒—香烟廣告の娘々—寝床白キヤノピイ、夏蚊帳—ウアド、紫檀彫、戸に鏡、—椅子（壁側）（小卓を挟む、小卓の下に銀色の啖壺）マホガニイ紛ひ、—大卓（中央）同上、—机（ウ並ぶ）、鏡、置時計、引き出し、—戸青—戸上に青—電燈二個—入口に帽子かけ

元版p808/現行版p369

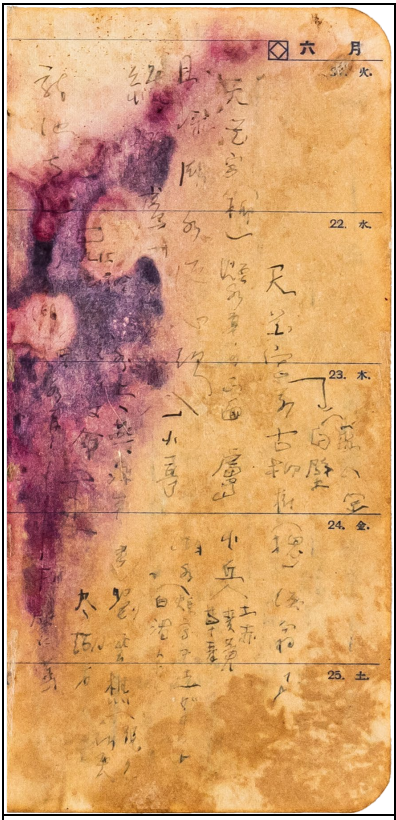
天花宮前古柳樹（槐）　漁翁　□
（藍へ金　白壁）

天花宮（柳）　煙水亭の正面　廬山　小丘　麥黄　土赤　草青
且將湖水洗心頭
纔識廬山眞面目　一小亭　湖水　煙亭ヲ遠ザカルト白濁トナル

龍池寺

九江總商会　甘棠湖　水上、燕、浮草　洗濯女　傘

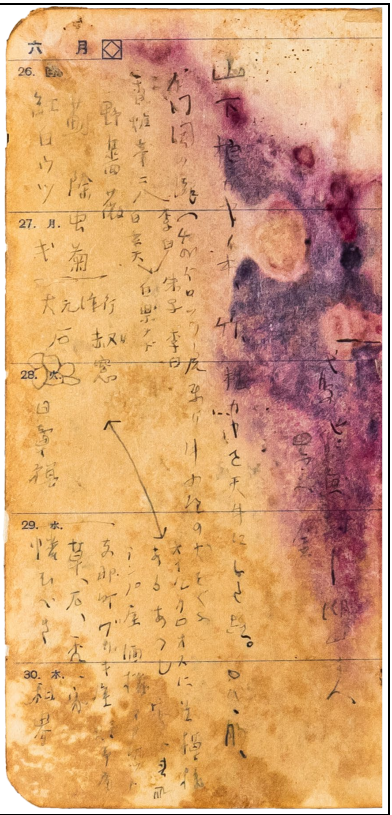
煙水亭　柳　壁に蔦
書〉劉□□　太湖石　（説ク　湖西人）




70

○龍池寺。九江總商會。甘棠湖。○煙水亭。蔦飛魚躍（黑へ金）、――湖山主人。柳。壁に蔦。洗濯女、傘。水上、燕、浮草。○一小亭。綠識廬山眞面目、且將湖水泛心頭。○湖水、煙亭ヲ遠ザカルト白濁トナル。○小丘。草青。麥黄。土赤。○天花宮。（柳）煙水亭の正面。廬山。○天花宮前古柳樹（槐）（藍へ金、白壁）漁翁。

元版 p808/現行版 p368



71

○紅白ウツギ。薊。除虫菊。野薔薇。○大元洋行。石。赤ヌリ。窓。日章旗。オイルクロオスに花模様あるあつし。○憐むべき租界。草。石。禿。家。支那町。ブリキ屋。煙草屋。ランプ屋。酒樓。マアケット。安貧所。

○香爐峯ニ白樂天、李白。○分門關の瀧。（4 or 5 日前虎來り牛小屋の犬をくふ。）○山下。カヤの木。竹。枯カヤを天井にした路。ロバ。豚。

元版 p807～808/現行版 p368

【「長江游記」三　廬山（上）、四　廬山（下）】

鳶飛魚躍——湖山主人

黒〈金

山下　中カヤノ木、竹、枯カヤを天井にした路。ロバ、豚、石門関の瀧（4 or 5 日前虎来り牛小屋の犬をくふ）

香爐峯ニ〈李白／朱子　李白
白楽天〉白楽ナド

野薔薇
薊　除虫菊
紅白ウツギ

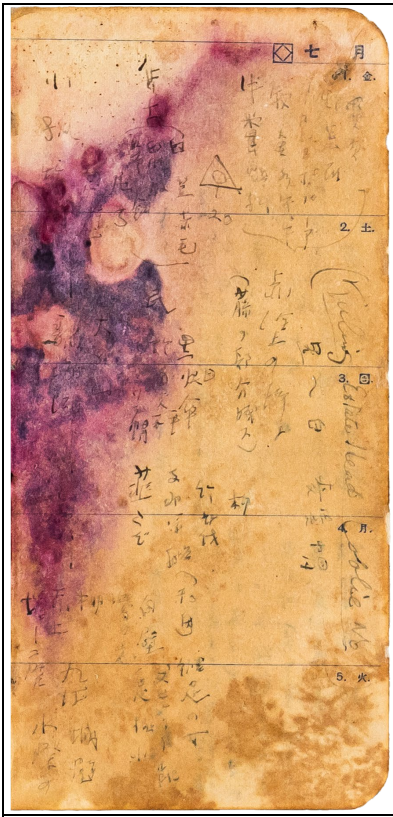
大元洋行
石　赤ヌリ
28. 水　窓
日章旗

オイルクロオスに花模様
あるあつし　安貧所
ランプ屋　酒楼　マアケット
支那町　ブリキ屋　煙草屋
草、石、禿、家
憐むべき　租界

麥黄
野薔薇
アカシア　ポプラア、
牧童　水牛、牛
牛糞燃料

20

(Kuling Estate Head Coolie No)
黒〉白　麥藁帽
赤塗の椅子
（籐の部分残ス）
日　柳
黒火傘　竹筏
民　竹の天秤　支那軍艦（和舟）　纏足の女
兵士　鼠服　白笠赤毛
帯　劍
ムギワラ帽　韮たば　白壁（ヌヒトリの靴）
足極小
紫の家
尼寺
白壁
竹樹
小孤
大孤山
——飜陽湖——廬山——赤土
塔—廃
九江　城壁
水際の

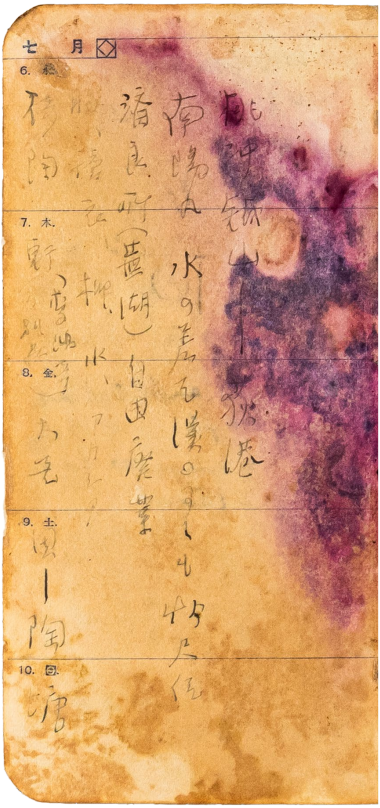


72

【「長江游記」二　溯江、三　廬山（上）】

○小孤。竹樹。白壁。尼寺。——飜陽湖。大孤山。——廬山。——赤土。塔（癈）。柳。紫の家。白壁。——九江。水際の城壁。○兵士（帯劍、鼠服、白笠赤毛）民（ムギワラ帽、竹の天秤、黒日傘）○韮たば。支那軍艦（和舟）。竹筏。柳。纏足の女（ヌヒトリの靴、足極小）。○牛糞燃料。牧童。水牛。牛。アカシア、ポプラア。野薔薇。麥黄。○赤塗の椅子（籐の部分残ス）。Kuling Estate Head Coolie No.（黒〉白。麥藁帽。）

元版 p807/現行版 p368



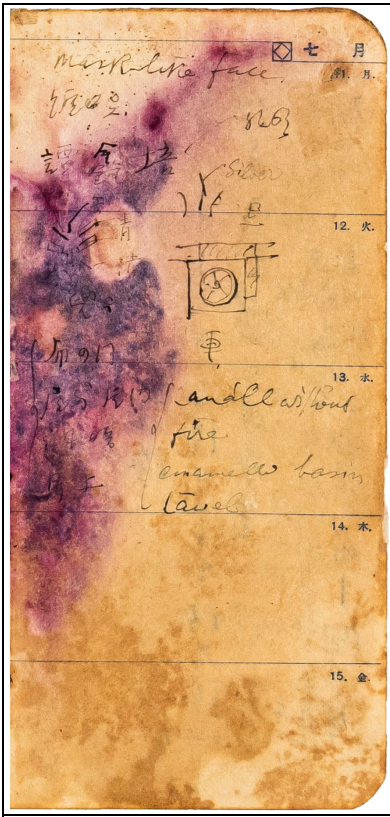

73

桃冲鐵山――荻港
南陽丸　水の差は漢口にても45尺位
済良所（蕪湖）自由廃業
豚、擣衣、柳、水、アカシア
倚陶軒（李鴻章の別荘）大花園――陶塘

○倚陶軒（李鴻章の別荘）。大花園――陶塘。豚。擣衣。柳。水。アカシア。濟良所（蕪湖）。自由廢業。南陽丸。水の差は漢口にても45尺位。桃冲鐵山――荻港。

【「長江游記」一　蕪湖、二　溯江】

元版p807/現行版p368




74

masklike face.

纏足、　孔明

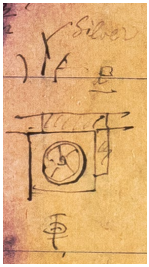
譚鑫培

赤

青

赤

兜□



Silver

足

車、

布の門

屋外屋内　candle without

明暗　fire

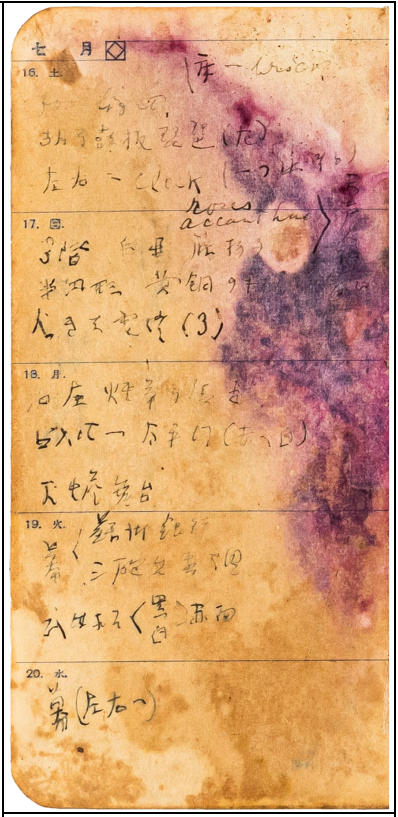
馬上　enameled basin

towel

masklike face. 纏足。譚鑫培——孔明。○布の門。屋外屋内。明暗。馬上。○candle without fire. enamelled basin. towel.

元版 p807/現行版 p367

床—brick
footlight.
胡弓鼓板琵琶（左）
左右ニ clock（一つ止まる）
roses
accanthus
天声人語（正面）
3 階　白亜　籐椅子
半円形　黄銅の手すり
大きな電燈（3）
右左煙草の廣告
Exit—大平門（赤へ白）
天蟾舞台
幕　蘇州銀行
三砲台香烟
武松　黒　白　赤面
幕（左右へ）

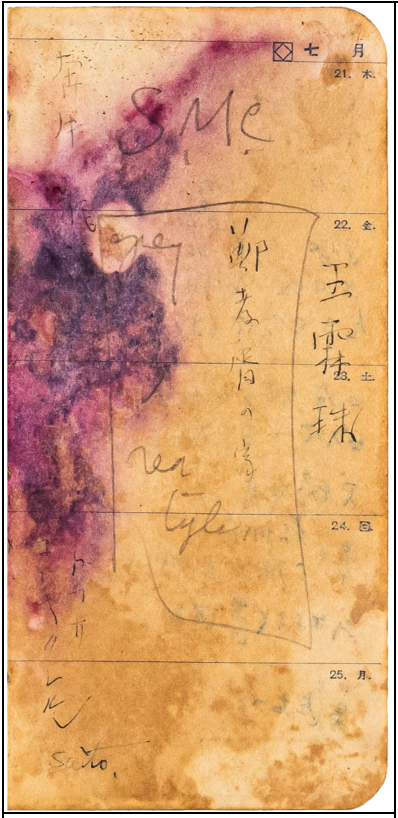



75

○天蟾舞臺。footlight. 床——brick. 胡弓鼓板琵琶（左）。左右ニ clock.（一つ止まる）天聲人語（正面）——rose, accanthus. 三階。白亞。籐椅子。半圓形、黄銅の手すり。大きな電燈（3）。右左煙草の廣告。入口——太平門（赤へ白）。幕——蘇州銀行、三砲臺香烟。武松——黒、白——赤面。幕（左右へ）。

元版 p807/現行版 p367

【「上海游記」九　戯臺（上）】




奔牛 龍□

S、M.C

grey □ 3 鄭孝胥の家 王霖珠

red Tyle

トカサ

コシヤクレル

Saito.

76

【「長江游記」一　蕪湖、「上海游記」二十一　最後の一瞥、十三　鄭孝胥氏】

○コシヤクレル。トカサ。Saito.

元版 p806/現行版 p367

□□医院

浅草北東□十□（□）（神田□□□□□□）

三□□八十□□□□行、

妻恋坂の途中、

□其つ外の家

□山一□□□万千

77

全集未収録

□□寺　門　□殿

石□　陵

西門外に高跳動あり　その為参詣人少し

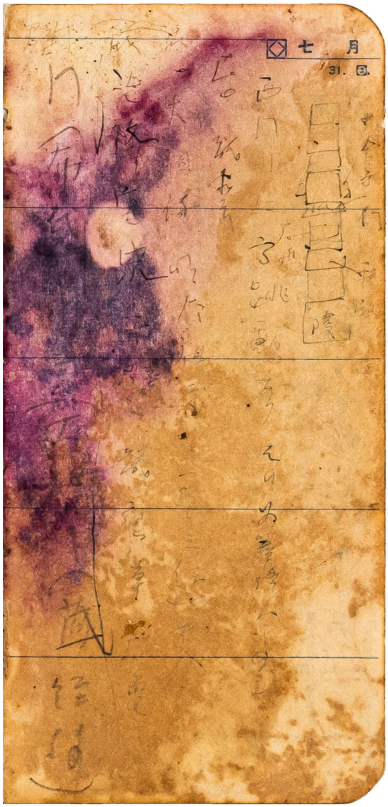
台　龍雲

□　太祖像（明太祖高皇帝之位）朱金

□　治隆唐宋（赤壁）　龍　唐草　石亀

壁朱

門（布袋）――堂（大雄）――（蔵経抄）



78

○門（布袋）――堂（大雄）――（藏經抄）

○治隆唐宋（赤壁）。龍。唐草。石亀。大祖像。明太祖高皇帝之位。朱金。臺、龍雲。

○西門外に高跳動あり。その爲參詣少し。

元版 p806/現行版 p367

【「江南游記」二十八　南京（中）】

江天禅寺

材木　貧民くつ　川　泥坊　鐘　煙

姜太公在此百無禁忌　材木　無　炭　舟（　桐　石炭

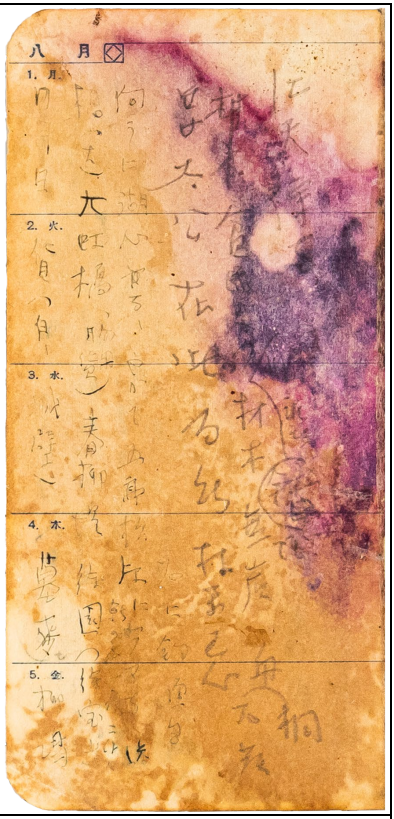
右に釣魚台

向うに湖心中寺、やがて五亭橋　左　にラマ寺（塔）

乾の為一夜ニ作ル

橋（大）大虹橋（勿用日貨）春柳堤　徐園（徐宝山）

勿用日貨（白、城壁）　墓麥柳鳩



79

○勿用日貨（白、城壁）。墓。麥。柳。鳩。橋（大）。大虹橋（勿用日貨）。春柳堤。徐園。（徐寶山）乾の爲一夜ニ作ル。向うに湖心寺。やがて五亭橋。左にラマ寺（塔）。右に釣魚臺。

○姜大公在此間無禁忌。貧民くつ。川。鐘。材木。泥坊。無煙炭。舟（石炭、桐）。江天禪寺。

【「江南游記」二十四　古揚州（中）、二十五　古揚州（下）、二十六　金山寺】

元版 p806/現行版 p367

牛糞を壁に貼るものあり（鳥打帽）
させるもの）
竹林中の茶亭（綠楊村）舟に女の子（玫瑰を髪に
赤欄の木橋（新橋）　城壁をくぐる　左　城壁に（蔦　小木）
汚水　煉瓦橋　靴を洗ふ女　菜　花　家々　新樹　鶩
家鴨
対聯　独立大道　文明世界
中共和万歳　安楽人家

のかけ声、拳をうつ声

梯子　（呉城醴品　京莊紹酒）驢の声鈴　轎子
菜は中正方形の新聞紙上におく（二錢位）田螺

80

【「江南游記」二十一　客棧と酒棧、二十六　金山寺、二十三　古揚州（上）、二十四　古揚州（中）】

菜は正方形の新聞紙上におく（二錢位）。田螺。梯子（呉城醴品、京莊紹酒）驢の鈴。轎子のかけ聲。拳をうつ聲。
○對聯。獨立大道、共和萬歳。文明世界、安樂人家。
○汚水。煉瓦橋。靴を洗ふ女。菜花。家々。新樹。家鴨。鶩。朱欄の木橋（新橋）。城壁をくぐる。左、城壁に蔦、小木。竹林中の茶亭。（綠楊村）舟に少女（玫瑰を髪にさせるもの）。牛糞を壁に貼るものあり（鳥打帽）。

元版 p806/現行版 p366～367

心臓　ヲ売リニ来ル男
胃袋
豚の腸　電燈　天井比較的高し
黒衣青袴　深青衣濃青袴の杜氏、卓上の菜
桟
痩犬　錫、筋（底に青蓮華茶碗程の盃、　辮髪の男。
酒
卓（タメ塗ハゲタリ）同じやうな腰かけ　白壁、煤柱、土間
酒桟（京荘　花雕）　白瓶（上酒赤瓶）
竹
北寺の塔　暮色　小呉軒
白壁　運河　新樹　蛙、鵲

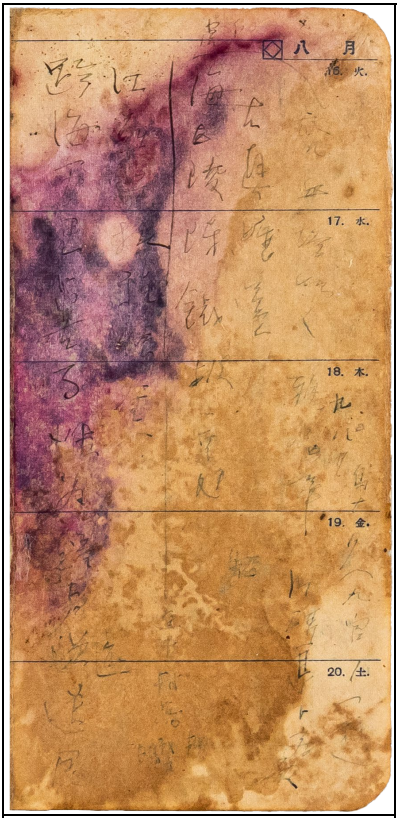
□中に□醤油瓶アリ

81

○白壁。運河。新樹。蛙。鵲。北寺の塔。暮色。小呉軒。
○酒桟。（京荘花雕）、白瓶（赤瓶上酒）。正方形の卓（タメ塗ハゲタリ）。同じやうな腰かけ。白壁。煤柱。土間。痩犬。錫。筋（茶碗程の盃、底に青蓮華）。辮髪の男。黒衣青袴。深青衣濃青袴の杜氏。卓上の菜。電燈。天井比較的高し。豚の腸、胃袋、心臓ヲ賣リニ來ル男。中に醤油瓶アリ。

元版 p806/現行版 p366

【「江南游記」十九　寒山寺と虎邱と、二十一客桟と酒桟】



82

鳥ナリ（九官ノ一種）

九パク

廃□塔傾く　鴉嘸声　御碑亭ト客殿

中

古眞孃墓

虎邱海□陵陳鐵坡重建　柳

途中村落　鵞　鴨

江蘇巡撫程德全、　遠

跨海万里弔古寺　惟為鐘声送君

【「江南游記」十九　寒山寺と虎邱と】

○跨海萬里弔古寺、惟爲鐘聲遠送君。江蘇巡撫程德全。

○途中村落。柳。鵞。鴨。

○虎邱。海陵陳鐵坡重建。古眞孃墓。癈塔傾く。鴉嘸聲。パク。鳥ナリ（九官ノ一種）。御碑亭ト客殿。

元版 p805～806/現行版 p366

七級塔

恨無十万横磨劍　殺盡倭奴方罷休

莽蕩河山起暮愁　何来不共戴天仇

見

中山閣

窓外　藤　竹　萬笏朝天の一部

窓　燈　籠

83

○窓、燈籠。窓外、藤、竹。萬笏朝天の一部。見山閣○莽蕩河山起暮愁、何來不共戴天仇、恨無十萬横磨劍、殺盡倭奴方罷休。○七級塔。

元版 p805/現行版 p366

【「江南游記」十七　天平と靈巖と（中）、十六　天平と靈巖と（上）】

呉中第一水　藻

盆□盂泉　玫瑰　の落花　落龍髯

泉　白雲泉　―　トタンの管　亭

南無無量／魚楽　ギボンユ　玫瑰　佛　藻を

壽佛　とる男

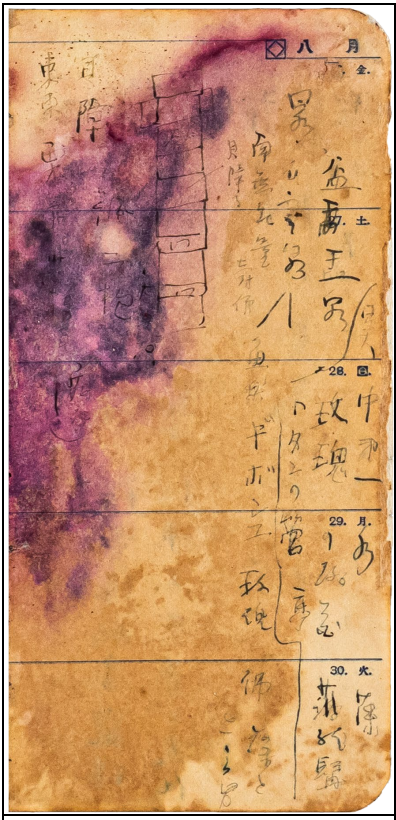
貝障子

大理石、

楓　二抱

貝障

棗　栗　西瓜　枝豆（茹□干）



84

【「江南游記」十六　天平と靈巖と（上）、十七　天平と靈巖と（中）】

○棗。栗。西瓜。枝豆（茹而于）。貝障。楓二抱。

○泉。白雲泉。盃盂泉。○魚樂。ギボシユ。玫瑰。佛。藻をとる男。○トタンの管。玫瑰の落花。亭。呉中第一水。藻。龍髯。

元版 p805/現行版 p366

諸君你在快活之時　不可忘了三七二十一條

人心平平　天下泰平

高義園　天平地平　人心不平

天平寺山　山羊　犬与日奴不得題壁

青衣の婆。

ホテル、野雉、三階、胡弓、朝のバラ賣り

85

○ホテル。野雉。三階。胡弓。朝のバラ賣り、青衣の婆。

○天平山。山羊。犬與日奴不得題壁。高義園。天平地平、人心不平、人心平平、天下泰平。○諸君儞在快活之時不可忘了三七二十一條。

元版 p805/現行版 p366

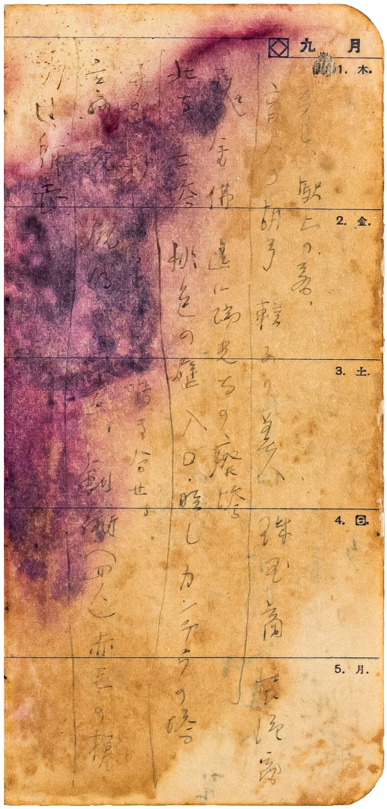
【「江南游記」十六　天平と靈巖と（上）】

多し、驢上の客。
盲人の胡弓　轎子の美人　珠玉商　装飾商

所々の金佛　遙に瑞光寺の廃塔
北寺　七塔　桃色の壁　入口暗し　カンテラの塔

手品　秋になると虫の鳴き合せ。
玄妙観　観後の書畫、剣術（四人）赤毛の槍

万世師表

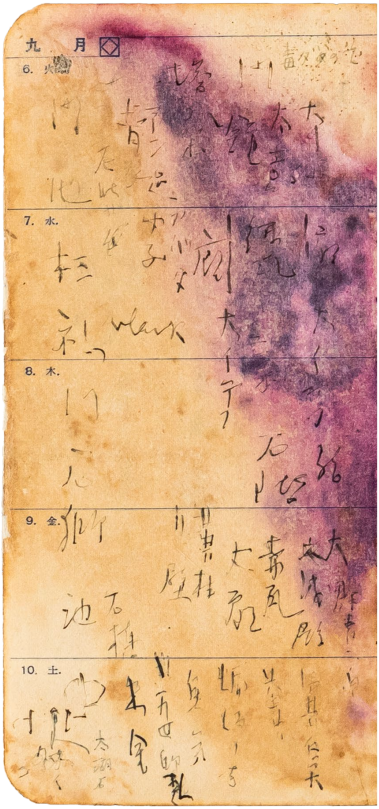



86

【「江南游記」十四　蘇州城内（中）、十三　蘇州城内（上）】

○玄妙觀。觀後の畫□。劍術（四人）。赤毛の槍。手品。秋になると虫の鳴き合せ。
○北寺。七塔。桃色の壁。入口暗し。カンテラの塔。所々の金佛。遙に瑞光寺の癈塔。
○盲人の胡弓。轎子の美人。珠玉商、装飾商多し。驢上の客。

元版 p805/現行版 p365～366

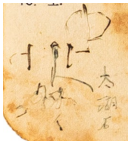


87

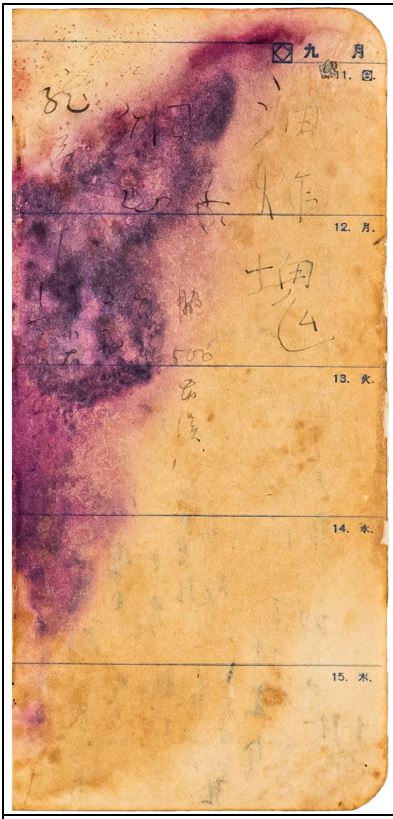
○孔子廟。門。池。杉。禮門 black. 石獅。池。石橋。青衣、テン足の老婆。女子、アバタ。塔。桑。門。毒ダミノ花。鐘。太鼓（大中小）。廊。煉瓦。廊。大イテフ、二三本。石階、龍。○大成殿。群青へ白。赤瓦。大廊。黄柱。黄壁。萬世師表。朱金。臭氣。蝙蝠の糞。異臭。

元版 p805/現行版 p365

毒ダミの花
門　大中小　廊
鐘　太鼓　煉瓦　大イテフ　龍
塔　桑　廊　大イテフ　二三本　石階
アバタ　黄柱　大　大成殿　異臭
テン足　女子　ゞ壁　萬万世師表　赤瓦　糞。
青衣　朱金　大扉　蝙蝠の□
の老婆中　black　石橋　太湖石
門　池　杉　礼門石獅　池



【「江南游記」十五　蘇州城内（下）】




88

龍□＋　39□　油炸塊

220□

1　3　□　脇

大布□　赤布□　積□　□　500

前後、

全集未収録

【「江南游記」八　西湖（三）】

Saved to two me□□.

In Loving Memory

of

Oyoshi Minae

Beloved wife of

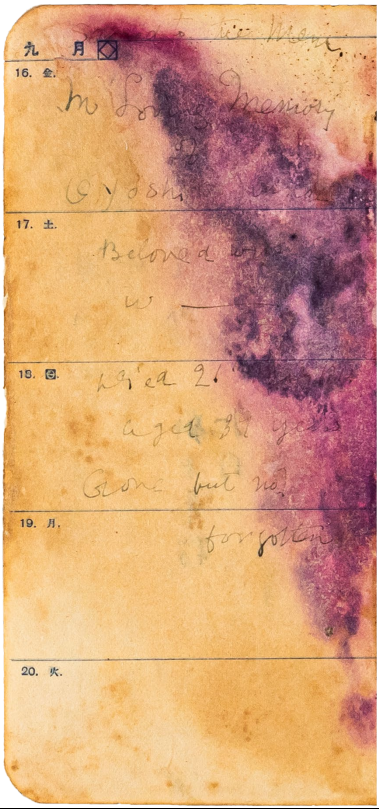
W ————

Died 26th July 1912

Aged 39 years

Gone but not

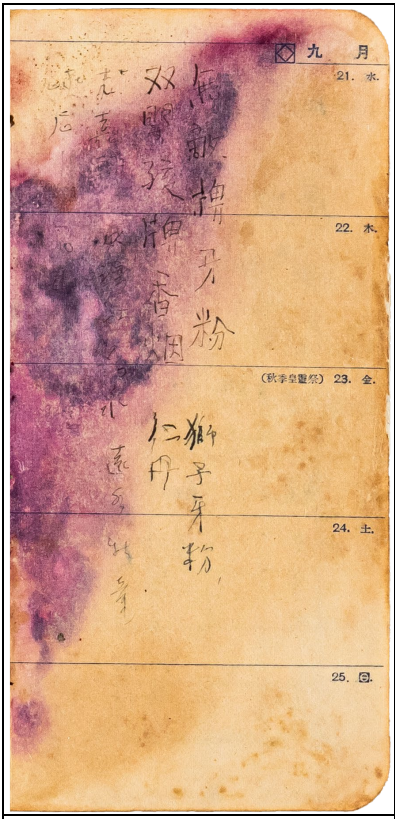
forgotten




89

○In Loving Memory of Oyoshi Minae. Beloved wife of W——. Died 26th July 1912. Aged 39 Years. Gone but not forgotten.

元版 p804/現行版 p365




90

無敵牌牙粉　獅子牙粉、
双嬰孩牌香烟　仁丹
□
赤嘉興、□湾江水　永　遠水牧童
硤石——石山

元版 p804/現行版 p365

○硤石——石山○嘉興、灣江水永、遠水牧童○双嬰孩牌香烟、無敵牌牙粉○仁丹、獅子牙粉

【「江南游記」二　車中（承前）】

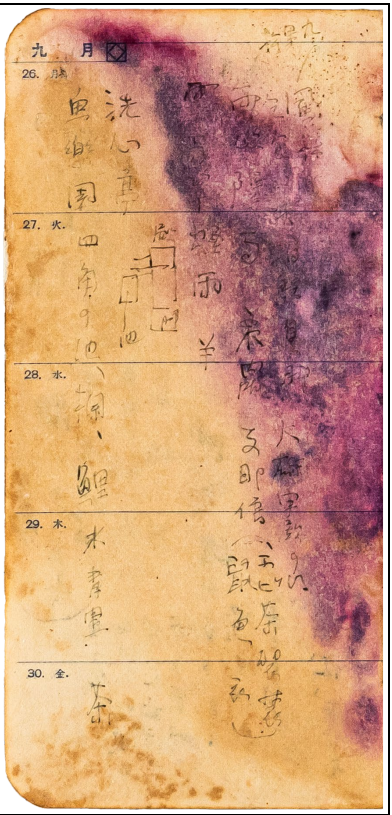
九里鳳林寺
松
乞食叩頭拍胸臭脚　大雄宝殿の後

靈隱寺　栗鼠　支那僧（エビ茶袈裟　鼠色　衣）

中萬竿煙雨　羊

洗心亭

魚楽園　四角の池、欄、鯉　水　青黒　茶




91

○魚樂園。洗心亭。四角の池。欄。鯉。水、青黒。茶。○萬竿煙雨。羊。○靈隱寺。栗鼠。支那僧（鼠色衣、エビ茶袈裟）。乞食叩頭拍胸臭脚。大雄寶殿の後。九里松。鳳林寺。

元版 p804/現行版 p365

【「江南游記」十二　靈隱寺、十六　天平と靈巖と（上）】

梅柳　　鵲　　菱

放鶴亭　柳　絮　　南京藻

女学生（白衣　木に亀　　芦

黒袴）　支那人　蛇　亀

中湖心亭　三潭　　支那人胡弓　笛

楼外楼（食館）——孤山　柳、梧、槐）　菜

水辺に衣を洗ひ叩く男あり

曲曲廊　伴坡亭

女二人

地の支那服の

児二人。西洋セル

赤衣紫袴の小

鮒を釣る

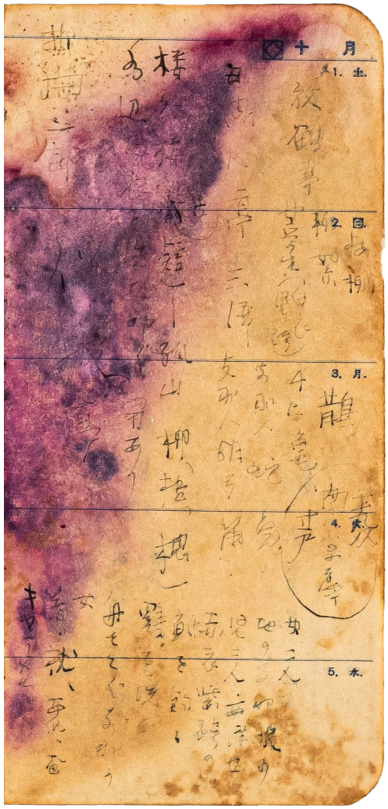
鶏を洗ふ

舟をこぐ支那の

女

箸、杖、西瓜、杏

キヤラメル



92

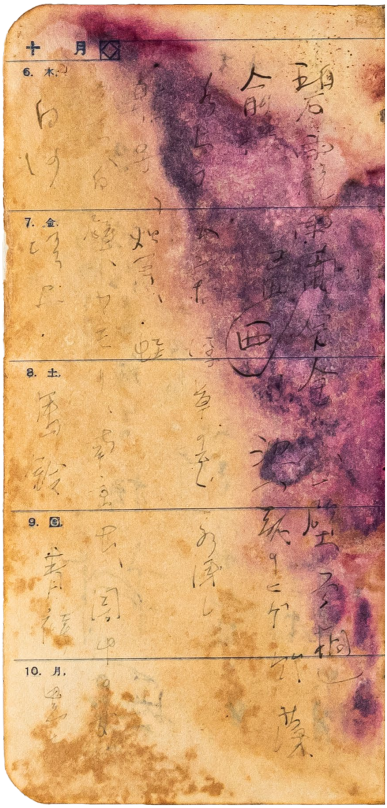
【「江南游記」六　西湖（一）、九　西湖（四）、十　西湖（五）、十一　西湖（六）】

○曲曲廊。伴坡亭。

○楼外楼（菜館）——孤山（柳、梧、槐）。箸。杖。西瓜。杏。水邊に衣を洗ひ叩く男あり。舟をこぐ支那の女。鶏を洗ふ。鮒を釣る。キヤラメル。赤衣紫袴の小兒二人。西洋セル地の支那服の女二人。

○湖心亭。三潭。支那人、胡弓、笛。支那人、蛇、亀。木に亀。○放鶴亭。女學生（白衣黒袴）。柳絮。梅。柳。鵲。芦。南京藻。菱。

元版 p804/現行版 p365



93

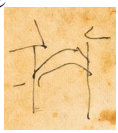
碧霞□□□舎　（白壁吾桐）
兪楼　中　西　池（龍のヒゲ　竹　藻
水上のトンボ　浮草の花　水浅し
轎子、螢、蛙
クモ、白壁、ヤモリ、南京虫、闇中の女
白沙　堤上　馬鈴　青袴黒衣

○白沙。堤上。馬鈴。青袴黒衣。クモ。白壁。ヤモリ。南京虫。闇中の女。轎子。螢。蛙。
○水上のトンボ。浮草の花。水浅し。
○兪楼。碧霞西舎。（白壁、□桐）池。（龍のヒゲ、竹、藻）

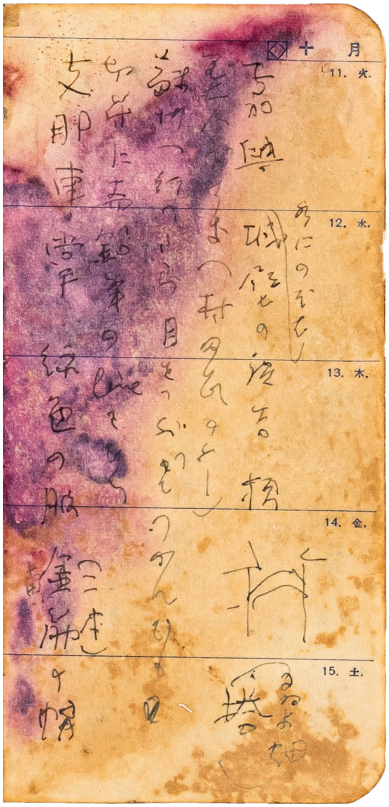
元版 p804/現行版 p365

【「江南游記」四　杭州の一夜（中）、十二　靈隱寺、五　杭州の一夜（下）、六　西湖（一）】

水にのぞむ
嘉興　城壁の廣告　橋
美人ですよ（村田氏の言）
つ
蘇州へ行ったら目をつぶゆてつかんでも中
切符に赤鉛筆の line をひく
（二本）
支那車掌　緑色の服　金筋の帽
黄



桑畑
塔

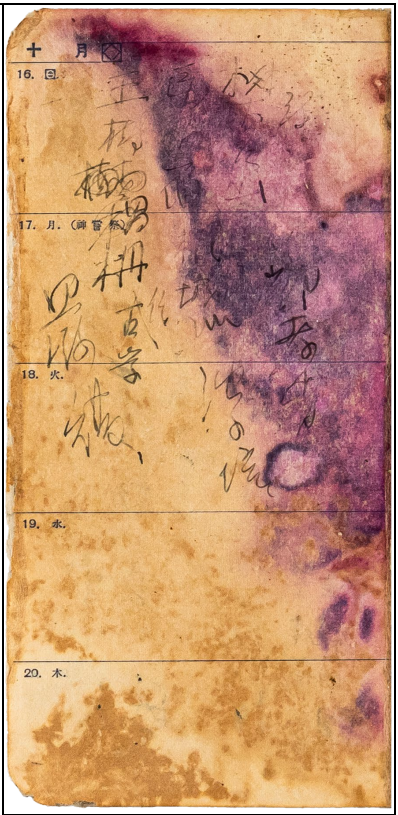


94

【「江南游記」一　車中、二十　蘇州の水、二車中（承前）】

○支那車掌。緑色の服。黄筋（二本）の帽。
切符に赤鉛筆の line をひく。
○蘇州へ行ったら目をつぶってつかんでも
美人ですよ。（村田氏の言）
○嘉興。水にのぞむ城壁の廣告。橋。塔。
桑畑。

元版 p804/現行版 p364～365

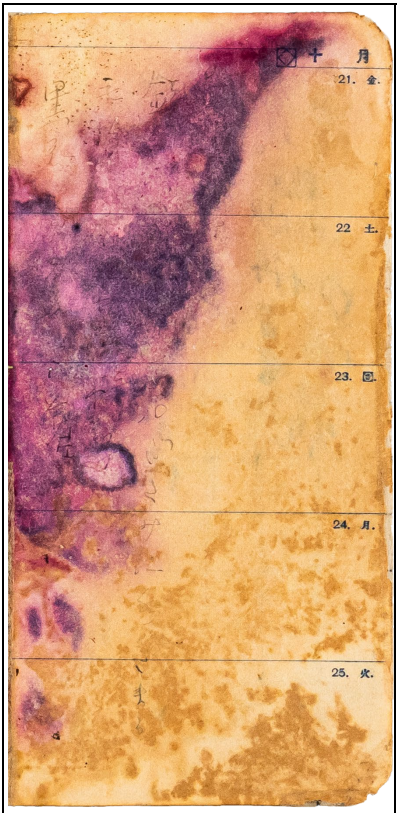



95

全集未収録

【王樹枏（枏）、沈子培、樊々山、鄭孝胥】いずれも当時の中国の学界・政界を牽引する学者。芥川とほぼ同時期に中国に留学した諸橋轍次による「漢学界の回顧　十一（口述）中国の学者の思い出」（『漢文教室』十九号、昭和三十年六月、https://kanjibunka.com/yomimono/rensai/yomimono-2168/）を参照されたい。なお、樊々山については、【「北京日記抄」四　胡蝶夢】に、「樊半山」として言及がある。

□　鄭孝胥
樊々山
□　面　□□　沈子培
□
王樹枏枏古学
一　楠　□□□




96

［約一行不明］

鐵の門（ペンキぬり）石だたみに水たまる

毛皮をかけし籐椅子

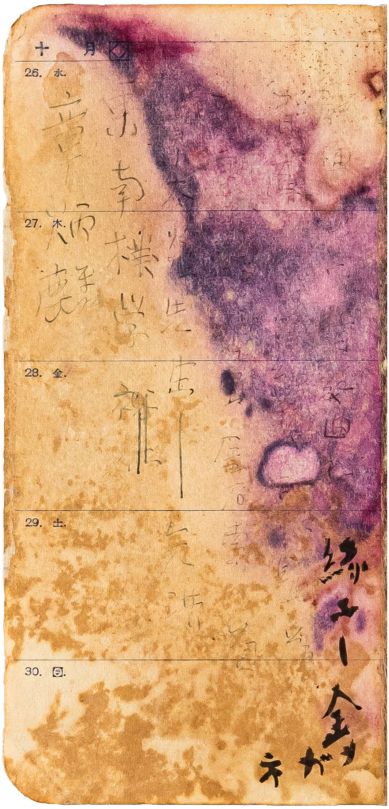
黒衣　灰色の下着

【「上海游記」十一　章炳麟氏】

黒衣。灰色の下着。毛皮をかけし籐椅子。鐵の門（ペンキぬり）。石だたみに水たまる。boy 案内す。

元版 p803～804/現行版 p364

顔面黄に　背□曲れり　縁なし金メガネ
眉薄く　眼細く　髭髯薄く
剝製の鰐　古書　金石索の箱
章太炎先生――元洪
東南樸学　裕仁
章炳麟

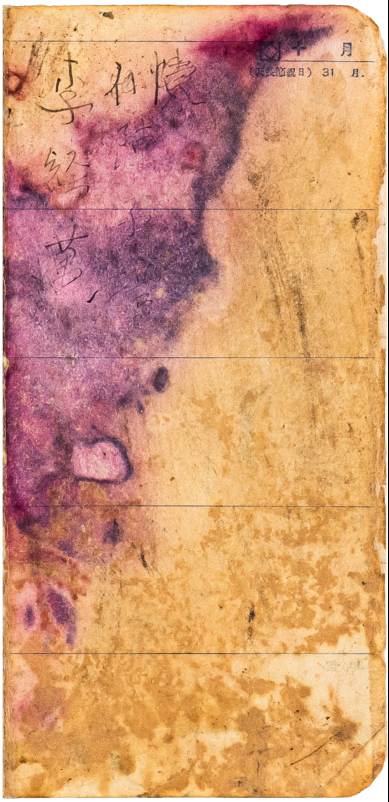


97

○章炳麟。東南撲學、章太炎先生――元洪。剝製の鰐。古書。金石索の箱。眉薄く、眼細く、髭髯薄く、顔面黄に、背曲れり。縁なし金メガネ。

元版 p803/現行版 p364

【「上海游記」十一　章炳麟氏】
【裕仁】昭和天皇への言及か。




98

懷
□陳子培
李経邁

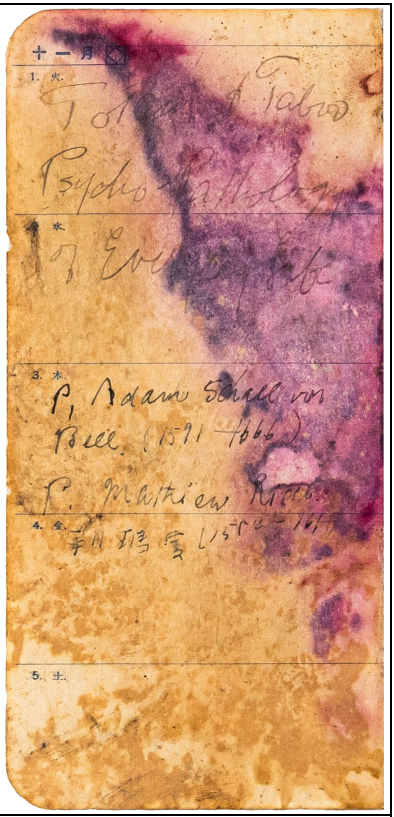
全集未収録

Totem & Taboo

□

Psycho-Pathology
of Eeveryday Life

P. Adam schall von
Bell.（1591-1666）
R. mathiew Ricci.
利瑪竇(1552-1610




99

全集未収録

【Totem & Taboo】フロイト『トーテムとタブー』(1913) の英題。「&」には複数の書き方があるが、「+」を崩した書体と思われる。
【Psycho-Pathology of Eeveryday Life】フロイト『日常生活の精神病理学にむけて』(1901) の英題。
【P. Adam schall von Bell.】Johann Adam Schall von Bell のことか。イエズス会の宣教師。中国名は「湯若望」。
【R. mathiew Ricci.】Matteo Ricci のことか。イエズス会の宣教師。中国名は「利瑪竇」。
【「上海游記」二十　徐家滙】

西皮調、武家坡。

薛平貴唱、

八月十五　月光明、　薛平貴在月下修写

王宝川唱　　薛唱

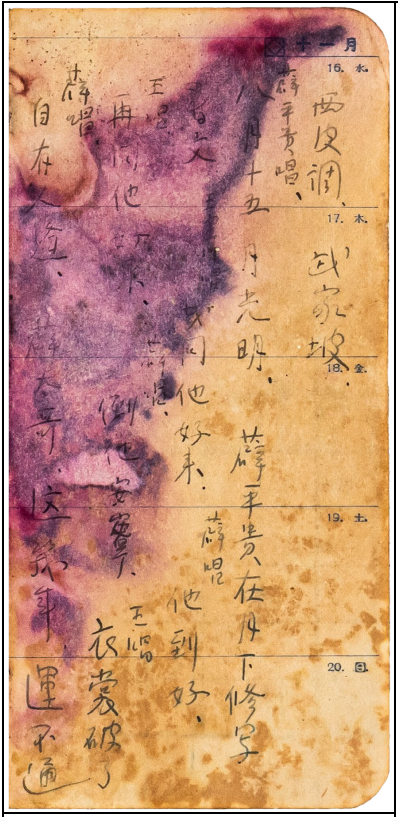
書文、　　我問他好来、　　他到好、

王唱、　　薛唱、　　王唱

再問他好来、　倒他安寧、　衣裳破了

薛唱、

自有人逢、薛太哥、这幾年、運不通



102

○西皮調、武家坡。薛平貴唱　八月十五月光明、薛平貴在月下修寫書文、王寶川唱　我問他好來、薛唱　他到好、王唱　再問他好來、薛唱　倒他安寧、王唱　衣裳破了、薛唱　自有人逢、薛太哥、这幾年、運不通

元版 p803/現行版 p364

他在那、西涼國、受了苦辛……

白髻
天竺　金釧寛
眞珠の首飾

2崑曲　江蘇省崑山縣より起る　笛
調慨慷哀惋悽楚　黛玉
1秦腔　胡弓と　笛　山西より起る　この

103

○黛玉。1秦腔。胡弓と笛。山西より起る。この調慨慷哀惋悽楚。2崑曲。江蘇省崑山縣より起る。笛。
○天竺。眞珠の首飾。金釧寛。白髻。
他在那、西涼國、受了苦辛……

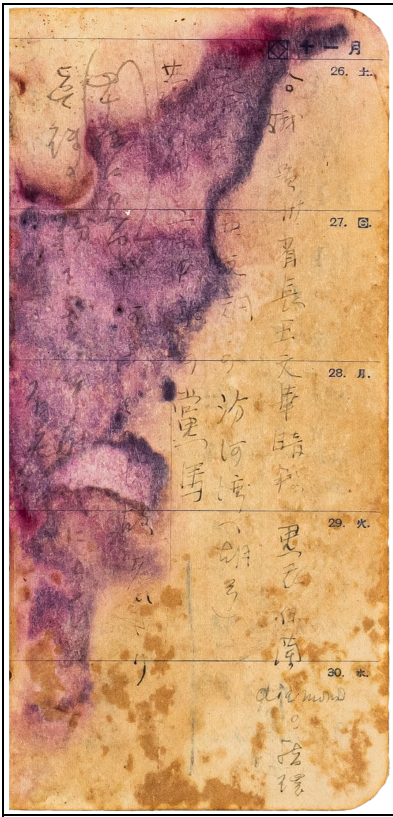
元版 p803/現行版 p364

【「上海游記」十六　南国の美人（中）】

【「上海游記」十六　南国の美人（中）、十七　南国の美人（下）】

洛娥　貴州省長王文華暗殺　黒衣白蘭　diamond の指環
秦楼　○西皮調の汾河湾（胡弓）
萍郷　京□調の黨馬

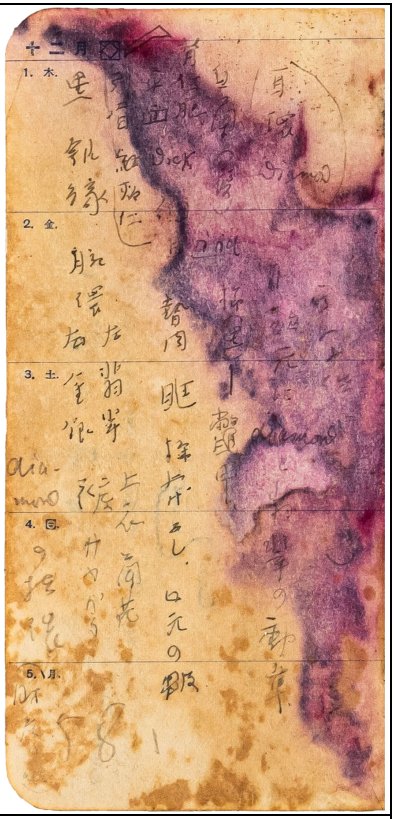
四十位に見ゆ　阿片をのむ故老いたり
眞珠の粉を青年時代にのむ
不老術




104

四十位に見ゆ。眞珠の粉を青年時代にのむ。不老術。阿片をのむ故老いたり。
○萍郷、京調の黨馬○秦楼、西皮調の汾河灣（胡弓）。○洛娥。貴州省長王文華暗殺。黒衣白蘭。diamond の指環。

元版 p803/現行版 p364



105

○黒。銀縁。腕環（左翡翠、右金銀）。褲サヤガタ。上衣蘭花。引眉。頬紅。平面。背低肥。細目 vivid. 贅肉。眶。揉上げなし。口元の皺。白蘭（髪）。櫛（黒）——鼈甲。耳環 Diamond. 頸元に diamond と翡翠の勳章。diamond の指環（財産の all）。手（子供じみたる）。五十八。

元版 p803/現行版 p364

【「上海游記」十六　南国の美人（中）】

手（子供じみたる）＜□□

耳環
Diamond

中頸元に diamond と翡翠の動章。

白蘭（髪）　櫛（黒）—鼈甲、

背低肥　細目 vivid

平面　Dick

引眉　紅頬紅　贅肉　眶　揉上げなし。口元の皺

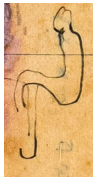
黒　銀縁　腕環　左　翡翠　上衣　蘭花

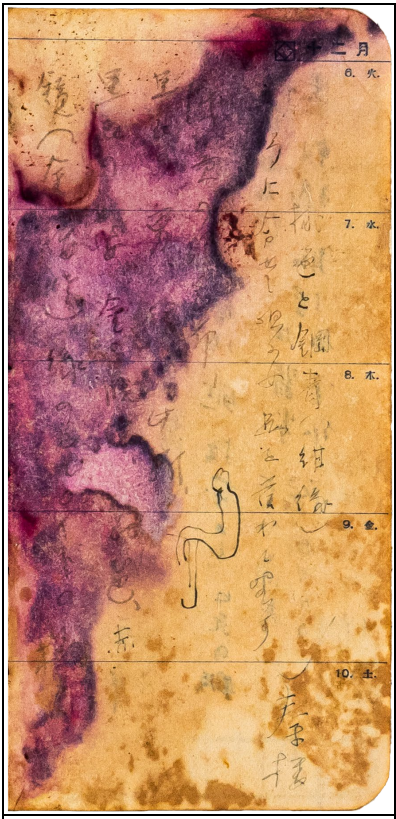
右　金銀　褲　サヤガタ　58、

dia-mond の指環（財産の all）

桃色と鋼青（紺縁）
胡弓に合せて唄ふ女　足を重ねて坐す　秦楼

浅黄の風呂布、
黒衣の男、鼠の中折、
黒衣の婆、金の腕環、　琵琶、赤
鏡（金―梅竹）緑のセルロイドの櫛



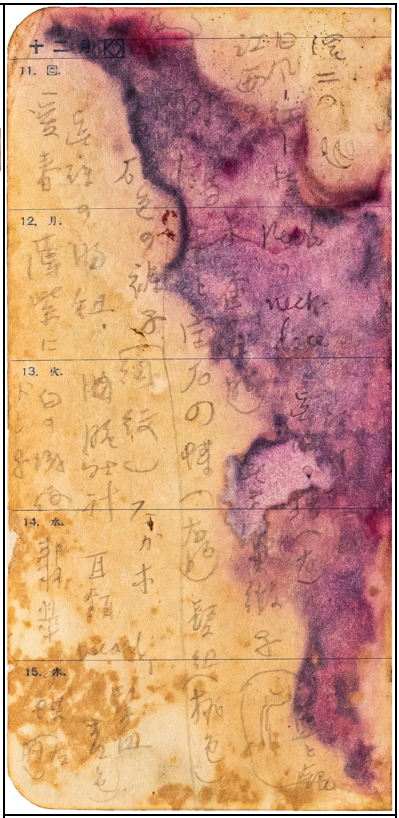



106

【「上海游記」十六　南国の美人（中）】

○鏡（金―梅竹）緑のセルロイドの櫛○黒衣の婆、金の腕環、琵琶○黒衣の男、鼠の中折、浅黄の風呂布
○胡弓に合せて唄ふ女、足を重ねて坐す。秦楼、桃色と鋼青（紺縁）。

元版 p803/現行版 p363



環二つ
旧風—紅—指　neck の neck lace　眞珠の環（右）　腕時計（左）
江西の人　藍と銀
時鴻　末香（左胸）　紫□緞子
金と宝石の蝶（右胸）髪紐（桃色）

青磁色の褲子（織紋）スガホ
眞珠の胸紐。中腕時計　耳飾 pearl、髪紐
愛春　薄紫に白の織紋　翡翠の蝶（胸）左（青色）
ドン子

107

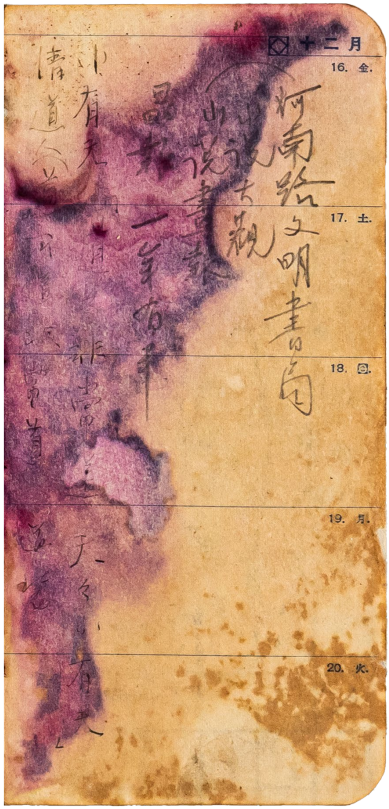
○愛春。薄紫に白の織紋（ドン子）。翡翠の蝶（左胸）。眞珠の胸紐。腕時計。耳飾 pearl. 髪紐（青色）。青磁色の褲子（織紋）。スカホ。
○時鴻。金と寶石の蝶（右胸）。髪紐（桃色）。木香（左胸）。紫緞子（藍と銀）。江西の人。舊風。紅。指環二つ。pearl の neck-lace. 眞珠の環（右）。時計（左）。

元版 p802～803/現行版 p363

【「上海游記」十五　南国の美人（上）、十六　南国の美人（中）】
【スガホ】素顔。

河南路文明書局
小説大観
小説畫報
晶報　一年有半

小有天「道々非常道　天々小有天」
清道人（道可道非常道）（道装



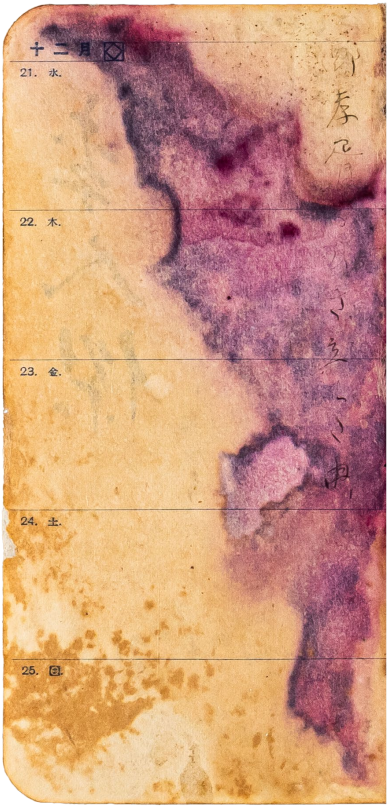

108

【「上海游記」十五　南国の美人（上）】
【文明書局】『小説大観』・『小説畫報』は、上海文明書局より刊行された雑誌。どちらも包天笑が編集主任を務めた。
【晶報　一年有半】『晶報』は一九一九年に創刊された上海の新聞。包天笑の作品に、『晶報』で掲載された「一年有半」（未調査）がある。

○小有天「道々非常道、天々小有天」○清道人（道可道非常道）道装

元版 p802/現行版 p363

鄭孝胥もひき立てた由、

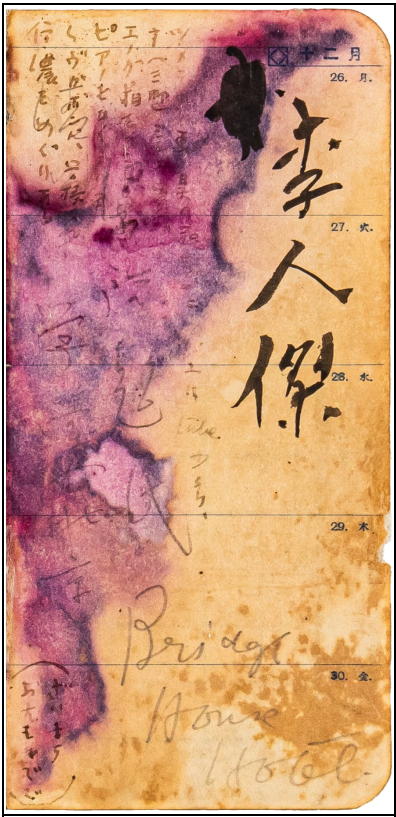



109

○鄭孝胥もひき立てた由。

元版 p802/現行版 p363

【「上海游記」十三　鄭孝胥氏】




110

李人傑

中

ツメテ□ 悪臭の［約一行不明］。
す（三脚）［約一行不明］
エノグ箱を［約一行不明］
ピアノをひく□□□
くヴガボンド、学校にて
信濃をめぐりある

梁啓超氏
清華学堂（北京）＼

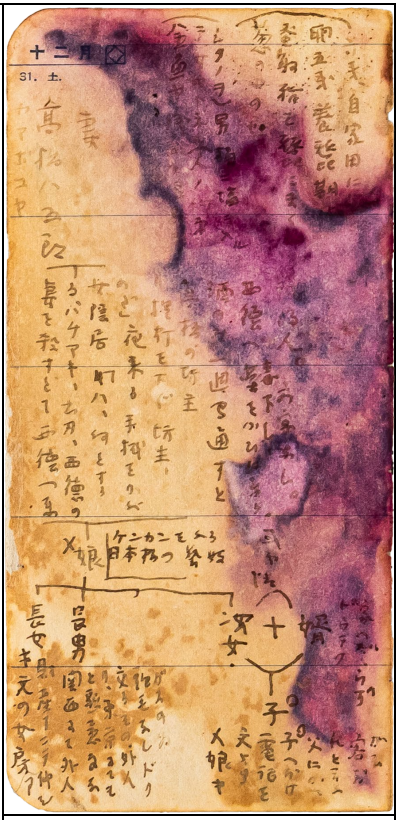
Bridge
House
Hotel.

ざいます
おは□□でご

【「上海游記」十八　李人傑氏】
【ヴガボンド】vagabond。放浪者、さすらいびとの意。バガボンド。
【清華学堂】清華大学の前身。清華大学に現存する。

○李人傑

元版 p802/現行版 p363



111

六戔、自家田に
卵五戔　養蠶期
蚕取　指を蠶にまく
葱の中の□

シタノヲ）男　桶ニ塩ヲ入ル
テ女□□□（人ノ□□
金魚ヤ［約一行不明］

妻
高橋八五郎
カマボコヤ

婦人。お□なし。
毒下し

西徳へ薬をかひに来る。
酒のみ一週間通すと
高橋の坊主
り提灯を下ぐ　坊主、
のだ」夜来る　手拭をかぶ
女隠居「中ハ、何とする
る、ハチマキ、出刃、西徳の
妻を殺すとて西徳へ来

×娘　ケンカンを入る
日本橋の藝妓

家へがへらず
ドウラク

或□□

婿
＋
次女・
○子

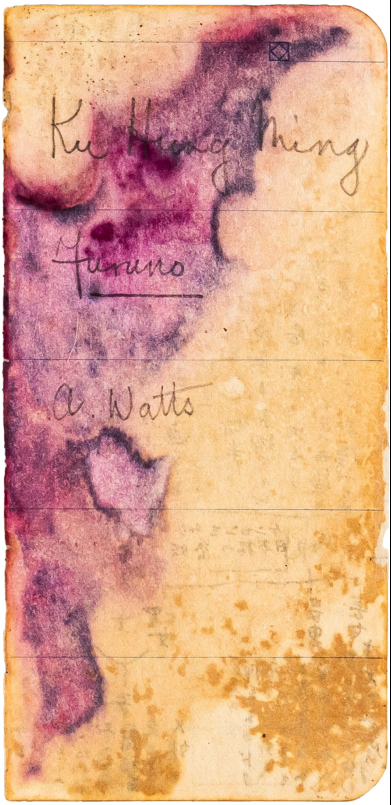
ガスの為
頭毛なし　ドク
交る　その外人
り、東京にても
と懇意にな

長男
関西にて外人
財産アニテ　仲シ
キ文の女房ヽア
長女

文より
×娘キ

電話を
父にかへ
○子へかけ
がむ
客お
れと云ふ

全集未収録




112

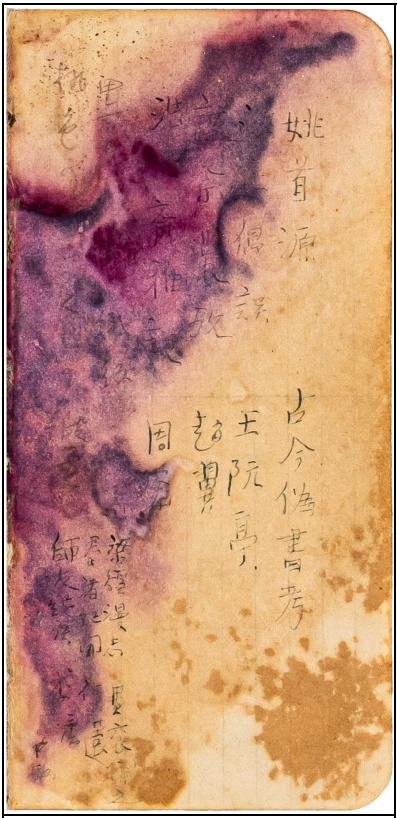
Ku Hung Ming
Furuno
A.Watts

全集未収録

【「北京日記抄」二　辜鴻銘先生】
【Ku Hung Ming】辜鴻銘の英語表記。

姚首源　古今偽書考
池北偶談　王阮亭、
該余叢攷　趙翼
浩然斎雅談　周密
黒の緞子　織紋
桃色の宝づくしの緞子

梁谿漫志　費袞補之
春渚紀聞　何薳
師友紀談　李　鴈

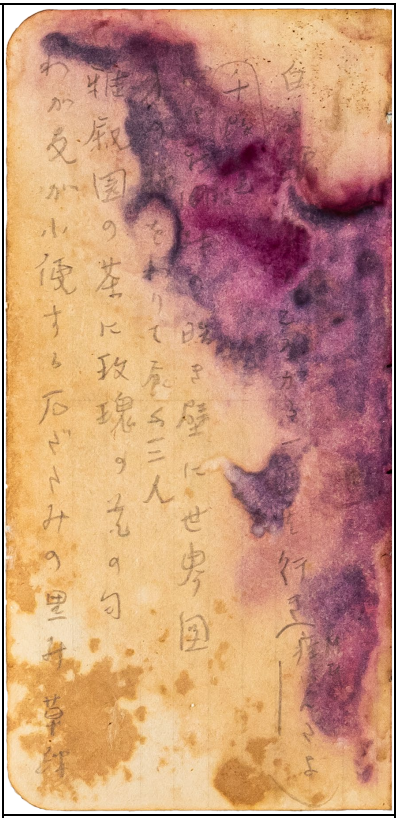


114

【「上海游記」十六　南国の美人（中）、十七　南国の美人（下）】
【池北偶談】芥川の旧蔵書に康熙三十年序の同書が収められている。中国旅行中に購入したか。
【該余叢攷】趙翼著『陔余叢攷』の誤り。
【師友紀談】李鴈撰『師友談紀』の誤り。

○桃色の寶づくしの緞子。○黒の緞子、織紋。
○師友紀談、李元攷○春渚紀聞、何薳○梁谿漫志、費袞補之○浩然齋雅談、周密○該余叢攷、趙翼○池北偶談、王阮亭○姚首源、古今偽書考

元版 p802/現行版 p363



115

わが友が小便する石だたみの黒み草疎
雅叙園の茶に玫瑰の花の匂
杏の種をわりて食ふ三人
時事新報社の暗き壁に世界圖
千坎堂
白き驢馬がころがる一匹は行キ（痒いんだよ——M氏）

元版 p802/現行版 p362～363

白き駈馬がころがる一匹は行き（痒いんだよ——M氏）

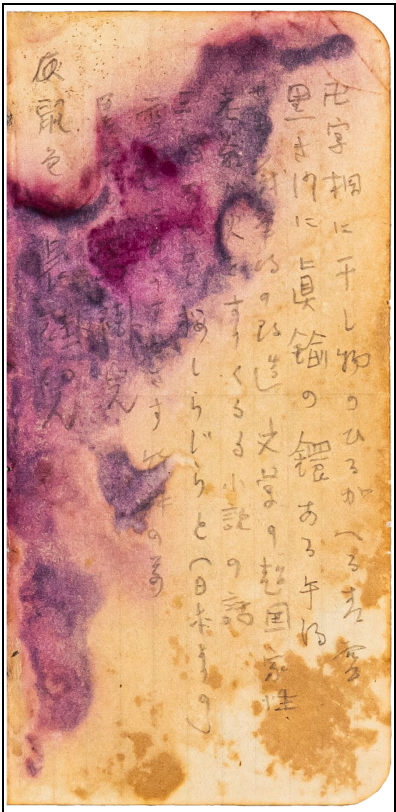
千坎堂

報

時事新□社の暗き壁に世界図
杏の種をわりて食ふ三人
雅叙園の茶に玫瑰の花の匂
わが友が小便する石だたみの黒み草疎

【「上海游記」十五　南国の美人（上）、二十一最後の一瞥】

卍字欄に干し物のひるがへる青空
黒き門に眞鍮の鐶ある午後
世界戦争後の改造文学の超国家性
老爺が火をすりくるる小説の話
三階なれば桜しらじらと（日本よりの）
雪毬に申うす日さす竹林の前
黒色の馬褂児
灰鼠色の長褂児

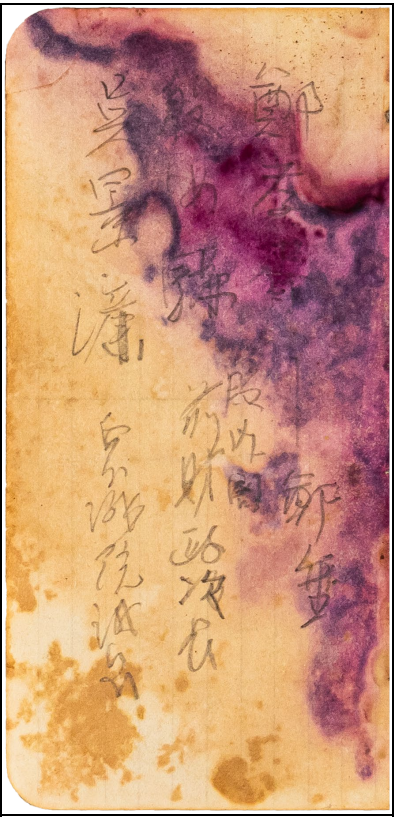


116

【「上海游記」十三　鄭孝胥氏】

○鼠色の長褂児
黒色の馬褂児
雪毬にうす日さす竹林の前
三階なれば櫻しらじらと（日本よりの）
老爺が火をすりくるる小説の話
世界戦争後の改造文學の超國家性
黒き門に眞鍮の鐶ある午後
卍字欄に干し物のひるがへる青空

元版 p801～802/現行版 p362



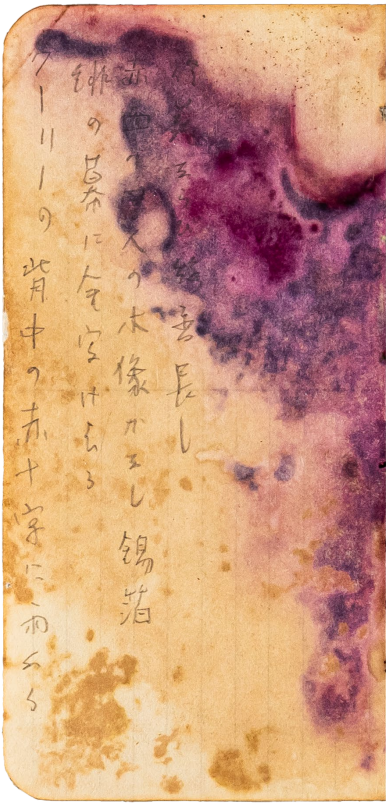
117

鄭孝胥——鄭垂
段内閣
殷汝驪　前財政次長
吳景濂　衆議院議長

全集未収録

【「上海游記」十三　鄭孝胥氏、二十一　最後の一瞥】

燈籠ならび線香長し
赤面の官人の木像かなし錫箔
緋の幕に金字けむる
クーリーの背中の赤十字に雨ふる



119

○クーリーの背中の赤十字に雨ふる
緋の幕に金字けむる
赤面の官人の木像かなし錫箔
燈籠ならび線香長し

元版 p801/現行版 p362

120

章炳麟

千坎□（□□路
山東路　〈〉）

全集未収録

【「上海游記」十一　章炳麟氏】

駅者の一人は眠る白馬なり麥畠
アカシア
Avenue
Joffre
木の芽の芽匂ふ路ばたのアマ
能成に似る印度人の巡査
紅桃の中に西洋館ある啼鴉
花菜畑に灰色煉瓦の墓二つ
春日にとぶ首白がらす
ゴルフ人に芝生青々

121

○ゴルフ人に芝生青々
春日にとぶ首白がらす
花菜畑に灰色煉瓦の墓二つ
紅桃の中に西洋館ある啼鴉
○Avenue Joffre
能成に似る印度人の巡査
アカシアの芽匂ふ路ばたのアマ
駅者の一人は眠る白馬なり麥畠

元版 p800～801/現行版 p361～362

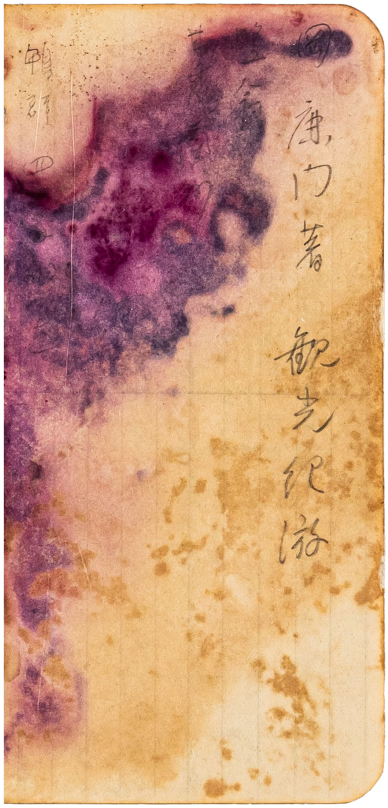
【「上海游記」二　第一瞥（上）】
【Avenue Joffre】上海のフランス租界にあった主要道路。中国名は「霞飞路」。現在の淮海路。

岡　庫門著　観光紀游

笠翁

甘粛蘭州

鴨群、四つ手網（大）□□




122

【岡庫門著　観光紀游】「庫」は「鹿」の略字。岡鹿門は『観光紀游』の著者。同書は「奇遇」（大十・四）に所出。「奇遇」冒頭で列挙された、中国旅行直前の「小説家」が「未だに読み切れない」「読む筈だった紀行や地誌」中の一冊で、列挙されている中で唯一日本近代文学館所蔵芥川文庫に収められている本である。

【笠翁】明末清初の文人・戯曲作家李漁の号。日本近世の画壇に大きな影響を与えた『芥子園画伝』に序文を寄せている。また、作品に『肉蒲団』があり、大正十年三月二十六日付沢村幸夫宛書簡で同書に言及している。【「上海游記」十七　南国の美人（下）】

鴨群、四つ手網（大）

元版 p800/現行版 p361

柳　山羊　アンペラ屋根　菜
る舟
黄旗　赤布包の棺　ジヤンク四五人　葬をおく
船尾に煤けたる日章旗
~~薬木~~
~~名刺木~~
~~カヲ□~~
~~方生筆~~
~~メガネ　ナイトキヤンプ~~
藍衣黒衣の支那人　□冠

123

藍衣黒衣の支那人、倭冠
船尾に煤けたる日章旗
黄旗、赤布包の棺、ジヤンク四五人、葬
をおくる舟
柳、山羊、アンペラ屋根、菜

元版 p800/現行版 p361

ア中ンペラ、布帆　舟色の赤、緑、コバルト藍
川の病む黄疸φ　舟の帆の日陰蝶
ジヤクの帆煙るブイの緑青色
水平の赭水紫立つ朝なり
星影に船員が仰ぐ六分儀

2435.23

荒るゝ海に鷗とび甲板のラシヤメン
アメリカ人がうつタイプライアに荒るる

124

【「上海游記」一　海上、「江南游記」二十二　大運河】

アメリカ人がうつタイプライタアに荒るる
荒るゝ海に鷗とび甲板のラシヤメン
星影に船員が仰ぐ六分儀
水平の赭水紫立つ朝なり
ジヤンクの帆煙るブイの緑青色
川の病む黄疸、舟の帆の日陰蝶
アンペラ、布帆、丹色の赤、緑、コバルト、藍

元版 p800/現行版 p361

支那人のボイが入日を見る額の廣さ
海上の
サルーンに常磐木の鉢ある
水夫らが甲板を拭ふ椰子の実よ海よ
船室の中リンネルの船窓かけに入日
Trapist　白雲観――北京、

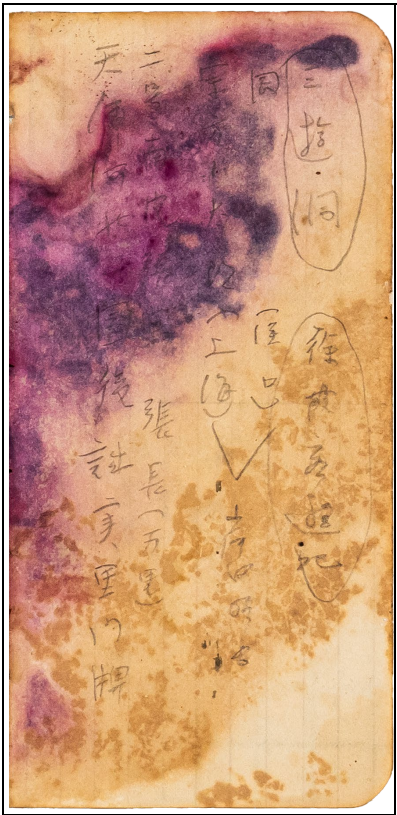
125

○Trapist　白雲觀――北京
○船室のリンネルの窓かけに入日
水夫らが甲板を拭ふ椰子の實よ海よ
海上のサルーンに常磐木の鉢ある
支那人のボイが入日を見る額の廣さ

元版 p799～800/現行版 p360～361

三遊洞　徐霞客遊記

岡　（漢口）
宗方小太郎　（上海）／岸田吟香
二号南皮張□　張長（万里）
天津　河北　園後詘実里門牌



126

【宗方小太郎】東亜同文会の創設関係者。芥川と会っていたことは【「江南游記」八　西湖（三）】で確認できる。

【岸田吟香】東亜同文会の創設関係者。芥川は同会が明治三十三年に創設した東亜同文書院を訪問していた。【「上海游記」十九　日本人】

【南皮】南皮は清末「四大名臣」の一人である張之洞一族の故地。張長（万里）も縁者か。

○三遊洞。徐霞客遊地。

元版 p799/現行版 p360

ピアノの鍵盤に number をつけ春雨をひく

仙人の松に上り登天の説　房子ノ夫

居る

なり。

祖母に内證　使に行くと云ふ　髪□のぶら下りしはおのれ

□髪を切つて　釈迦に入学試験を祈る（お百度）

髻　業平

文覚　久夢日記　天□和三年ノの事

127

○髻 文覚 業平　久夢日記　天和三年の事

○髪を切つて釈迦に入學試驗を祈る（お百度）。祖母に内證。使に行くと云ふ。髪のぶら下り居るはおのれなり。

○仙人の松に上り登天の話。

○ピアノの鍵盤に number をつけ春雨をひく。房子の夫。

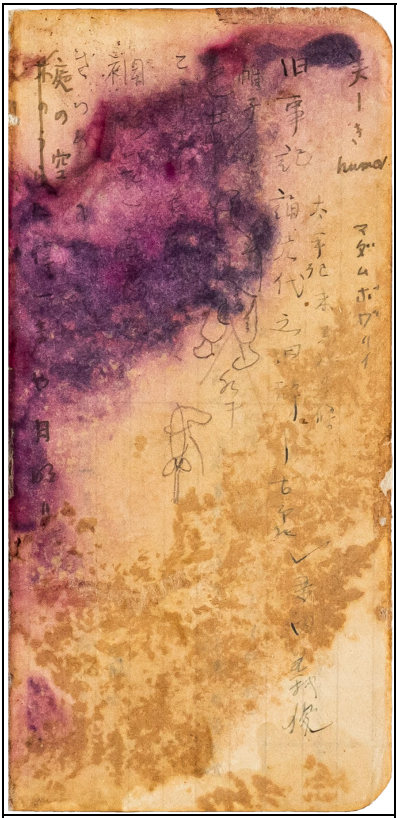
元版 p799/現行版 p360

【髪を切って・お百度】断髪の話、および家族に黙ってお百度を踏む話は、「雛」（「中央公論」、大十二・三）にも見られる。

【仙人】「サンデー毎日」創刊号（大十一・四・二）に掲載。大正十年三月十九日、芥川が中国旅行のために東京を離れ、大阪滞在中で執筆したとされる。

【房子】「影」（「改造」、大九・九）の主人公陳彩の妻と同名。また、のち佐佐木茂作の妻となった大橋房子とも同名。大正九年八月四日・十一月十一日などの佐佐木宛書簡に、大橋房子についての言及がある。

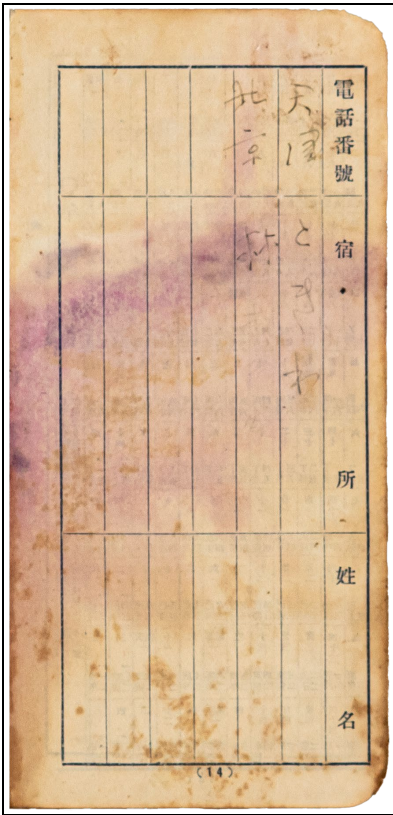
美しき　マダムボヴリイ
humor
旧事記　太平記未来記の條
誦先代之旧辞――古事記　多田義俊
帽子
色黄
こより［約一行不明］
襴衫（衣）　□衣
きらめ［約一行不明］
庭の空
木のもに蟬一声や月明り



128

○庭の空に蟬一聲や月明り
○舊事記誦先代之舊辭――古事記　多田義俊
太平記未來記の條
○美しき humour.　マダムボヴリイ。

元版 p799/現行版 p360




206

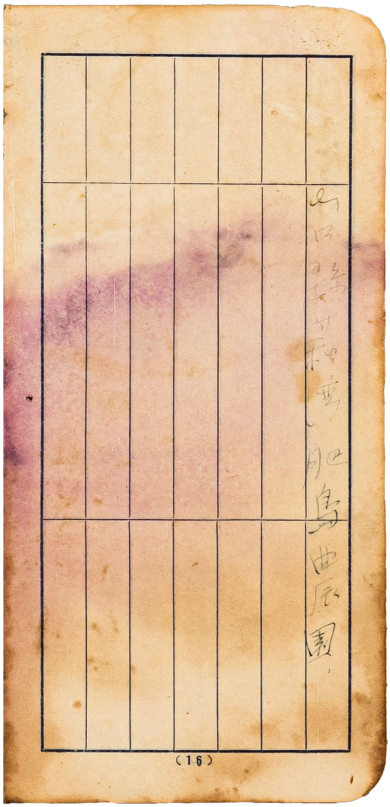
天津　ときわ
北京　林□□□

全集未収録

竹の雪、

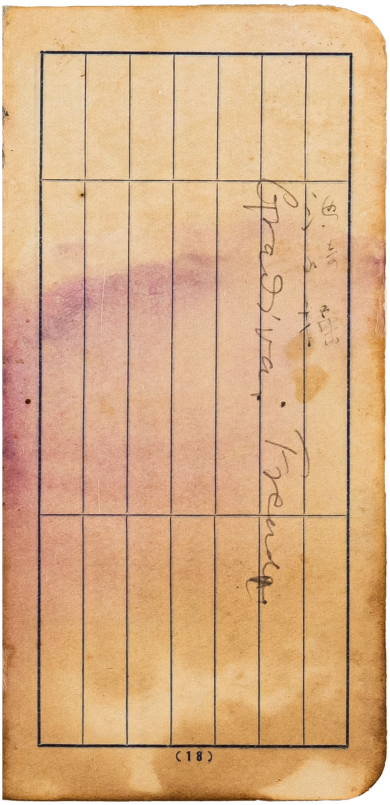
207

全集未収録




208

全集未収録




210

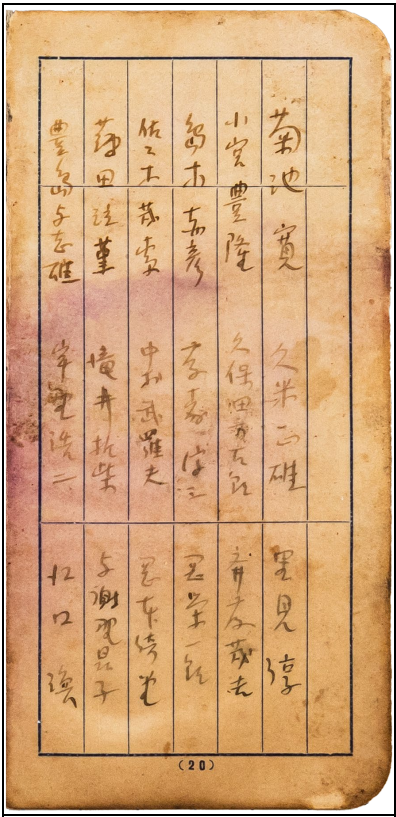
池崎操

Gradiva：Freude

【Gradiva】小説『グラディーヴァ』(1903) はドイツの作家イェンゼン (Jensen Wilhelm 1837.2.15～1911.11.24) による、ポンペイを舞台にした作品。フロイトによって取り上げられ、その成果は精神分析の文学理論のさきがけとなった。

【Freud】フロイト (Freud Sigmund 1856.5.6～1939.9.23)、オーストリアの精神分析学者。

全集未収録

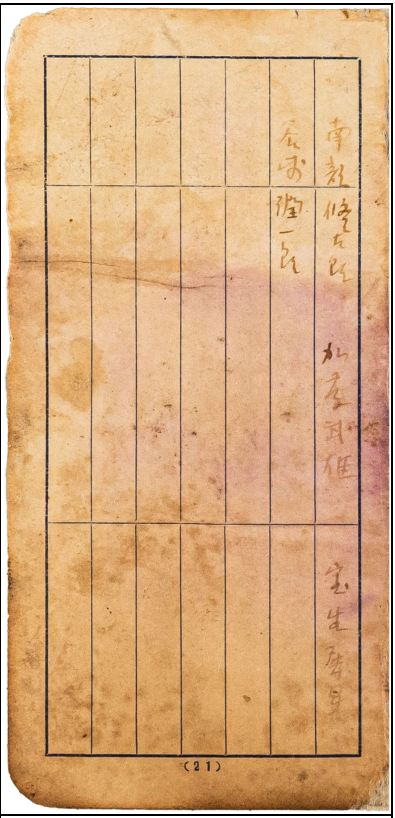


212

菊池寛　久米正雄　里見弴
小宮豊隆　久保田万太郎　斎藤茂吉
島木赤彦　藤森淳三　岡栄一郎
佐々木茂索　中村武羅夫　岡本綺堂
薄田泣菫　滝井折柴　与謝野晶子
豊島与志雄　宇野浩二　江口渙

大正十年三月十九日付中根駒十郎宛書簡中の『夜来の花』の献本リストと比較すると、「小宮豊隆」と「久保田万太郎」の順番が前後していることを除き、ほかはすべて一致している。

全集未収録



213

南部修太郎　加藤武雄　室生犀星
谷崎潤一郎

全集未収録

『夜来の花』の献本リストの続き。

222

□□□ゝとまで□□□

おひやのがれし

［約一行不明］

［約一行不明］

全集未収録

## 筆記用具一覧表

第一節で述べたように、本稿における翻刻に際しては画像編集ソフトPhotoshopを用いて色調を補正し、芥川のメモを鮮明化した。本稿中の図版も、上記補正をしている。一方でメモは複数の筆記用具で書き込まれていたため、それぞれの色がすべて黒一色に見えてしまい、区別しにくくなったという難点もある。そのために、補正前のオリジナルデータで筆記用具の色を確認し、一覧表を作成した。

本表は、筆記用具の色のほかに、本稿で割愛した翻刻対象外のページの基本状況（空欄・印字・欠損）も掲載している。

| | 鉛筆 | 万年筆（ブルーブラック） | 万年筆（ブラック） | 毛筆 | 空欄 | 印字 | 欠損 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | | | | | | ○ |
| 2 | | | | | | | ○ |
| 3 | | | | | | ○ | |
| 4 | | | | | | ○ | |
| 5 | | | | | | ○ | |
| 6 | | | | | | ○ | |
| 7 | | | | | | ○ | |
| 8 | | | | | | ○ | |
| 9 | | | | | | ○ | |
| 10 | | | | | | ○ | |
| 11 | | | | | | ○ | |
| 12 | | | | | | ○ | |
| 13 | | | | | | ○ | |
| 14 | | | | | | ○ | |
| 15 | | | | | | | ○ |
| 16 | | | | | | | ○ |
| 17 | | | | | | | ○ |
| 18 | | | | | | | ○ |
| 19 | | | | | | ○ | |
| 20 | | | | | | ○ | |
| 21 | | | | | | ○ | |
| 22 | | | | | | ○ | |
| 23 | | | | | | ○ | |
| 24 | | | | | | ○ | |
| 25 | | | | | | ○ | |
| 26 | | | | | | ○ | |
| 27 | | | | | | ○ | |
| 28 | ○ | ○ | | | | | |
| 29 | | | | | | | ○ |
| 30 | | | | | | | ○ |
| 31 | | | | | | | ○ |
| 32 | | | | | | | ○ |
| 33 | ○ | ○ | | | | | |
| 34 | | ○ | | | | | |
| 35 | | ○ | | | | | |
| 36 | | ○ | | | | | |
| 37 | ○ | | | | | | |
| 38 | | ○ | | | | | |
| 39 | | ○ | | | | | |
| 40 | | ○ | | | | | |
| 41 | | ○ | | | | | |
| 42 | | ○ | | | | | |
| 43 | | ○ | | | | | |
| 44 | | ○ | | | | | |
| 45 | | ○ | | | | | |
| 46 | | ○ | | | | | |
| 47 | | ○ | | | | | |
| 48 | | ○ | | | | | |
| 49 | | ○ | | | | | |
| 50 | | ○ | | | | | |
| 51 | | ○ | | | | | |
| 52 | | ○ | | | | | |
| 53 | | ○ | | | | | |
| 54 | | ○ | | | | | |
| 55 | | | | | | | ○ |
| 56 | | | | | | | ○ |
| 57 | | | | | | | ○ |
| 58 | | | | | | | ○ |

| | 鉛筆 | 万年筆（ブループラック） | 万年筆（ブラック） | 毛筆 | 空欄 | 印字 | 欠損 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 59 | | ○ | | | | | |
| 60 | | ○ | | | | | |
| 61 | | ○ | | | | | |
| 62 | | ○ | | | | | |
| 63 | | ○ | | | | | |
| 64 | | ○（「普及版全集」月報に写真あり） | | | | | |
| 65 | | | | | | | ○（翻刻あり、「普及版全集」月報に写真あり） |
| 66 | | | | | | | ○（翻刻あり） |
| 67 | | ○ | | | | | |
| 68 | | ○ | | | | | |
| 69 | | ○ | | | | | |
| 70 | | ○ | | | | | |
| 71 | | ○ | | | | | |
| 72 | | ○ | | | | | |
| 73 | | ○ | | | | | |
| 74 | | ○ | | | | | |
| 75 | | ○ | | | | | |
| 76 | ○ | ○ | | | | | |
| 77 | ○ | ○ | | | | | |
| 78 | ○ | ○ | | | | | |
| 79 | ○ | ○ | | | | | |
| 80 | | ○ | | | | | |
| 81 | | ○ | | | | | |
| 82 | | ○ | | | | | |
| 83 | | ○ | | | | | |
| 84 | | ○ | | | | | |
| 85 | | ○ | | | | | |
| 86 | | ○ | | | | | |
| 87 | | ○ | | | | | |
| 88 | | ○ | | | | | |
| 89 | | ○ | | | | | |
| 90 | | ○ | | | | | |
| 91 | | ○ | | | | | |
| 92 | | ○ | | | | | |
| 93 | | ○ | | | | | |
| 94 | | ○ | | | | | |

| | 鉛筆 | 万年筆（ブループラック） | 万年筆（ブラック） | 毛筆 | 空欄 | 印字 | 欠損 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 95 | | ○ | | | | | |
| 96 | | ○ | | | | | |
| 97 | | ○ | | | | | |
| 98 | | ○ | ○？ | | | | |
| 99 | ○ | ○ | | | | | |
| 100 | | | | | ○ | | |
| 101 | | | | | ○ | | |
| 102 | | ○ | | | | | |
| 103 | | ○ | | | | | |
| 104 | ○ | ○ | | | | | |
| 105 | ○ | ○ | | | | | |
| 106 | ○ | ○ | | | | | |
| 107 | ○ | | | | | | |
| 108 | ○ | | ○ | | | | |
| 109 | | | ○ | | | | |
| 110 | ○ | | ○ | ○ | | | |
| 111 | | | ○ | | | | |
| 112 | ○ | | | | | | |
| 113 | | | | | ○ | | |
| 114 | ○ | ○ | | | | | |
| 115 | ○ | | | | | | |
| 116 | ○ | | | | | | |
| 117 | ○ | | | | | | |
| 118 | | | | | ○ | | |
| 119 | ○ | | | | | | |
| 120 | ○ | | | | | | |
| 121 | ○ | | | | | | |
| 122 | ○ | | | | | | |
| 123 | ○ | | | | | | |
| 124 | ○ | | | | | | |
| 125 | ○ | | | | | | |
| 126 | ○ | | | | | | |
| 127 | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 128 | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 129 | | | | | | ○ | |
| 130 | | | | | | ○ | |

| | 鉛筆 | 万年筆<br>（ブループラック） | 万年筆<br>（ブラック） | 毛筆 | 空欄 | 印字 | 欠損 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 131 | | | | | | ○ | |
| 132 | | | | | | ○ | |
| 133 | | | | | | ○ | |
| 134 | | | | | | ○ | |
| 135 | | | | | | ○ | |
| 136 | | | | | | ○ | |
| 137 | | | | | | ○ | |
| 138 | | | | | | ○ | |
| 139 | | | | | | ○ | |
| 140 | | | | | | ○ | |
| 141 | | | | | | ○ | |
| 142 | | | | | | ○ | |
| 143 | | | | | | ○ | |
| 144 | | | | | | ○ | |
| 145 | | | | | | ○ | |
| 146 | | | | | | ○ | |
| 147 | | | | | | ○ | |
| 148 | | | | | | ○ | |
| 149 | | | | | | ○ | |
| 150 | | | | | | ○ | |
| 151 | | | | | | ○ | |
| 152 | | | | | | ○ | |
| 153 | | | | | | ○ | |
| 154 | | | | | | ○ | |
| 155 | | | | | | ○ | |
| 156 | | | | | | ○ | |
| 157 | | | | | | ○ | |
| 158 | | | | | | ○ | |
| 159 | | | | | | ○ | |
| 160 | | | | | | ○ | |
| 161 | | | | | | ○ | |
| 162 | | | | | | ○ | |
| 163 | | | | | | ○ | |
| 164 | | | | | | ○ | |
| 165 | | | | | | ○ | |
| 166 | | | | | | ○ | |

| | 鉛筆 | 万年筆<br>（ブループラック） | 万年筆<br>（ブラック） | 毛筆 | 空欄 | 印字 | 欠損 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 167 | | | | | | ○ | |
| 168 | | | | | | ○ | |
| 169 | | | | | | ○ | |
| 170 | | | | | | ○ | |
| 171 | | | | | | ○ | |
| 172 | | | | | | ○ | |
| 173 | | | | | | ○ | |
| 174 | | | | | | ○ | |
| 175 | | | | | | ○ | |
| 176 | | | | | | ○ | |
| 177 | | | | | | ○ | |
| 178 | | | | | | ○ | |
| 179 | | | | | | ○ | |
| 180 | | | | | | ○ | |
| 181 | | | | | | ○ | |
| 182 | | | | | | ○ | |
| 183 | | | | | | ○ | |
| 184 | | | | | | ○ | |
| 185 | | | | | | ○ | |
| 186 | | | | | | ○ | |
| 187 | | | | | | ○ | |
| 188 | | | | | | ○ | |
| 189 | | | | | | ○ | |
| 190 | | | | | ○ | | |
| 191 | | | | | | ○ | |
| 192 | | | | | ○ | | |
| 193 | | | | | | ○ | |
| 194 | | | | | | ○ | |
| 195 | | | | | | ○ | |
| 196 | | | | | | ○ | |
| 197 | | | | | | ○ | |
| 198 | | | | | | ○ | |
| 199 | | | | | | ○ | |
| 200 | | | | | | ○ | |
| 201 | | | | | | ○ | |
| 202 | | | | | | ○ | |

| | 鉛筆 | 万年筆（ブルーブラック） | 万年筆（ブラック） | 毛筆 | 空欄 | 印字 | 欠損 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 203 | | | | | | ○ | |
| 204 | | | | | | ○ | |
| 205 | | | | | | ○ | |
| 206 | | | ○ | | | | |
| 207 | | | ○ | | | | |
| 208 | | ○ | | | | | |
| 209 | | | | | ○ | | |
| 210 | ○ | ○ | | | | | |
| 211 | | | | | ○ | | |
| 212 | | | ○ | | | | |
| 213 | | | ○ | | | | |
| 214 | | | | | ○ | | |
| 215 | | | | | ○ | | |
| 216 | | | | | | ○ | |
| 217 | | | | | | ○ | |
| 218 | | | | | ○ | | |
| 219 | | | | | ○ | | |
| 220 | | | | | ○ | | |
| 221 | | | | ○ | | | |
| 222 | ○ | | | | | | |
| 223 | | | | | | | ○ |
| 224 | | | | | | | ○ |

注

（1）発表内容については、章瑋「芥川龍之介　一九二一年の中国旅行と「奇遇」の虚実―「絹帽子」と「雛」草稿」の直筆資料から見えるもの―」（『芥川龍之介研究』第十五号、令和三年十月）を参照されたい。

（2）西山康一「新発見の封筒が持つ可能性　実物により見えてくるいくつかの疑い」、『芥川龍之介研究年誌』第五号、平成二十三年七月

（3）西山氏のご指摘により、稿者が「手帳六」の翻刻に取りかかった経緯については、注（1）の注二十一にも記している。

（4）「庫」は「鹿」の略字。

（5）水沢不二夫「芥川全集「手帳（六・七）」未収録分―【梗概】新版全集未収録分の翻刻及び書簡、『支那遊記』、『湖南の扇』をめぐる注釈」、『近代文学注釈と批評』五、平成十五年五月

（6）石割透「芥川龍之介の手帳やノート断片―藤沢市文書館所蔵「葛巻文庫」から」、『有鄰』第三百六十九号、平成十年八月

（7）櫟原直樹「葛巻文庫の芥川龍之介自筆資料―ノート断片・草稿断片・手帳―」、『藤沢市文書館』紀要二十一、平成十年三月

（8）「手帳六」のマイクロフィルム資料番号は「96‐12‐000084」から始まり、平成八（一九九六）年十二月に撮影されたと思われる。

（9）注（7）に同じ。

（10）注（7）に同じ。

（11）注（7）に同じ。

（12）注（5）に同じ。

（13）注（5）に同じ。

（14）欠損ページを除く、正しいページ順を保つマイクロフィルムを直接翻刻の底本に使用しなかった理由は、モノクロで紫色の染みが黒く写り、翻刻できる範囲が限られているためである。

（15）小林茂樹『最新版　図解　よくわかる印刷発注のための実務知識』、同文舘出版株式会社、令和二年一月

（16）メモがあるが、マイクロフィルム資料番号一二七と一二八の間に、一コマの撮影漏れがある。

（17）日記欄の見開き一コマ分、マイクロフィルム資料番号一一六と一一七の間相当。注（5）水沢論ではこの見開きを現存しないページに計上してい

る。

（18）注（7）櫟原論に、「日記欄の四月一一日～四月三〇日の四頁分が欠損している」と指摘されている。

（19）注（5）水沢論において、「五月三十一日から六月五日分」が現存しないと指摘されている。

（20）翻刻及び略注は、注（5）水沢論を参照した。翻刻に関しては、水沢論との異同を一々示さない。また本稿略注に関しては、水沢論との重複を避け、一部の補足および判読困難箇所に関する情報、並びに関係作品の指摘のみに留めた。

※翻刻を除いた引用は、適宜新字体に改めた。本稿で掲載した図版の撮影に際しては、藤沢市文書館のご協力はもとより、服部徹也氏（東洋大学）・出口誠氏（金沢学院大学）のご助力をいただいた。また、本稿の「手帳六」の復元に関する部分（第四節の一部）は、令和四年三月に行われた国際芥川龍之介学会ISAS第16回国際大会において、「芥川龍之介「手帳六」考続貂―「手帳六」の復元とフロイトについて―」と題して口頭発表した。その際に伊藤一郎氏から「普及版全集」における「手帳」翻刻の異同問題をご教示いただいたことで、現存しない「手帳六」の六十五ページの発見（「普及版全集」の「月報」第五号に掲載）に繋がった。記して心より御礼を申し上げたい。なお本稿はJSPS特別研究員奨励費20J10750の研究成果の一部に当たる。